
遊戯王GX ～ある双子の兄の場合～

時給145円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX〜ある双子の兄の場合〜

【Nコード】

N8905S

【作者名】

時給145円

【あらすじ】

遊戯王GXにオリジナル主人公を据えてみた実験作。

Arcadia様にも投稿してあります。

一話目：始点

/

真っ向から叩きつけられるあからさまな敵意。

親の仇を見るようなその視線を受け、誰か胃薬を恵んで欲しいと心の中で切に願う。

しかし、世間というか周囲の反応は実に冷たいものだった。

この状況を離れた場所から見物するばかりで、誰も助け舟を出してはくれそうにない。

元凶にして頼みの綱である我が双子の弟は、実に良い笑顔で「頑張れー！」などと声援を送ってくる。

既に胃の痛みが限界に達しつつある僕に頑張れとは、お前は鬼かと。

ああ、本当にどうしてこうなった。

現状を憂いたところで何も変わらないなんてことは理解しているが、それでもこう思わずにはいられない。

本来ならば僕は、地元にある普通科の公立高校へ進学し、平々凡々に過ごすはずだったのだ。

その後は普通に大学へ進学し、最終的には無難に公務員に……という自らの人生設計は、試験当日に脆くも崩れ去ることとなる。

制限速度と信号を無視し爆走する赤いスポーツカーにより、ゴミのように轢かれ宙を舞う我が肉体。

「あれほど芸術的な轢かれっぷりは、おそらく人類史においてもかなり稀有な事例だろう」

とは目撃者の談。現場に居合わせた人々は激しく引きつつも、どこか感心すらしていたという。

もつとも、当時の自分にはそんなことを気にする余裕など欠片も無かったわけだが。

一意専心。ただ試験を受けねばという一念で、己が四肢を駆動させる。

轢かれ方こそ派手だったが、幸いにも痛みは無い。つまり傷自体は浅い。ならば全くもって問題無い！

我ながら本当に素晴らしい、正に非の打ち所の無い三段論法であった。

微妙に全身の関節の角度や向きがおかしい気もするが、まあ些細なことだろう。

自分を轢いた車の運転手の罪は、敢えて問うまい。生きていれば人の一人や二人跳ねてしまうこともあるだろう。それがたまたま自分だったというだけの話だ。

この機会に安全運転に開眼し、優良ドライバーにでもなつて欲しい。ふと、慰めの言葉の一つもかけてやるべきかとも思ったが、生憎と僕には時間的余裕など無く、一刻も早く試験会場に向かう必要があった。

そもそも、相手は規律を破ったとはいえ成熟した大人であり、自分は中学の卒業を控えた子供である。

自分より人生経験も少なく、親の脛をかじって生きている子供の慰めなど、はつきり言つて無用であろう。

いつも増して血の巡りの悪い頭でそんなことを考え、自身の肉体が許す限界の速さで走り出す。

前述の通り余裕は無いが、全力で走ればまだ間に合うはずであった。間に合うはずだったのだが……結果として、僕は試験会場に辿り着くことすら出来なかった。

周囲に集まっていた野次馬に取り押さえられ、無理やり病院へと搬送されたからである。

後々考えてみれば周囲の判断は当然であったが、あの時点では到底許容出来るものではなかった。

「大丈夫です。全く問題ありません」

そう言いつつ、頭から多量の血を流している僕の姿は、端から見ればホラー以外の何物でもなかったと野次馬は語っていたらしい。

その後、病院で全治二週間と診断され即刻入院。

医者からは人間の耐久力を超えているなどと言われたが、十分重傷であったしきつと冗談だったのだろう。

そんなこんなで、僕は志望校を受験することなく、中学浪人の道を邁進することとなった。

無論、受け入れてくれる高校を探しはしたが、自宅から通える位置にあるのは私立のみだったこともあり、最終的に今年中の進学を諦めたのである。

両親は気にしなくていいと言ってくれたが、それは無理というものだ。

ただでさえ子供 更に、我が家の場合は双子である には金がかかるというのに、そのうえ私立に行かせてくれなどという我が儘

を言えるはずがない。

それが自分の不注意によるものならば尚更だ。

そう。自分を轢いた運転手の罪は問わないなど、実に傲慢な考えである。轢かれた、などと被害者面するとは何事か。

もつと用心すべきだっただけの話だ。いち早く異変を察知し、危険に近寄らないか、悪くとも避けてしまえ良かったのだ。

試験を受けられなかったのは自業自得、自身の不注意と愚鈍さが故のもの。真に被害者というべきは、人を轢いたという事実を背負うこととなったあの運転手の方だろう。

悔いは無い。と言えば嘘になる。

あの日のために死ぬ程、とまではいかないがそこそこ勉強はしていたのだから。

この努力が全くの無駄になることはないだろうが、それでも僅かばかりの徒労感是否定しえない。

一年。一年である。

一年も自分は周囲から出遅れるのだ。この差は長い人生からすれば小さなものだが、現時点ではあまりにも大きい。

だからだろう。僕がその話に食いついてしまったのは。

「もう高校行かないんだろ？　じゃあ、俺と一緒にデュエルアカデミア受けようぜ！」

己と血を分けた半身、唯一無二の双子。

三度の飯より決闘好きと公言して憚らない弟の言葉に、僕は一瞬の躊躇いもなく頷いていた。

デュエルアカデミア。

弟は随分前から受験すると言っており、何度が僕自身も誘われてはいた。

性質はやたら敷居の高い専門学校みたいなものという認識で大きな間違いは無いはずだが、将来のことを考えると気軽に選べる選択肢ではない。

そもそも入学自体が難しく、在学中も非常に厳しいカリキュラムが待ち受けていると聞く。

しかも、卒業後の進路も異常に競争率が高く、ほとんど博打と言われる程度にはリスクが大きい。

将来は安定した収入が得られる職業に。と考えていた僕にとっては、少なくとも優先順位の高い選択肢ではなかったため、弟の申し出は断っていたのだ。

しかし。しかしだ。現在、このままでは中学浪人が確定してしまう状況において、そんなことは些末な問題であった。

リスクは大きい。だが、その分リターンも多いのだ。

失敗したくないのなら、リスクを恐れるのならば、他人の千倍、万倍の努力を重ねねば良いのである。

幸い、と言っべきか。デュエルアカデミアは実力主義。実力さえ示せば、自ずと道は拓けてくる。

こうして僕は弟と共にデュエルアカデミアを受験し 実技試験当日に、揃って遅刻したのであった。

想像してみて欲しい。金髪おかつぱの成人男性から、凄まじい形相で睨み付けられる状況を。

しかも周囲からの視線も集まり、ちょっとした羞恥プレイのような状態だ。とりあえず、激しく胃が痛い。

目の前の男性　実技担当最高責任者のクロノス・デ・メディチ教諭は、十代に負けたのが相当悔しいようだ。

次の相手である僕は確実に潰す、という確固たる意志が視線から感じられる。

正直、睨むのは止めて欲しいところだが、敗戦を悔やむのは決闘者に必要な資質。

入学試験とはいえ、全霊をかけるその姿勢は、流石は実技担当最高責任者というだけのことはある。

いや、待て。それほどの肩書きを持つ人物が、そんな程度であるはずがない。十代との決闘は紛れもない真剣勝負であった。つまり、彼は入学試験において手を抜かない。

即ち、受験生と本気でぶつかり合うことを望んでいるということか。

素晴らしい。正に教育者の鑑のような人物である。

自身を乗り越えるべき強大な壁として、若人の成長の礎となるべく職務に殉ずるなど、易々と出来ることではない。

おそらく。否、間違いなく、この睨むような視線もまた、教諭なりの愛の鞭なのだろう。

この程度で畏縮するならば先はない。そう無言のうちに教えてくれていたのだ。

器が違うとはこういうことを言うのか。

ただ眼前に立つだけで、千の言葉と比してなお雄弁に語るとは。

ここに立つたことを後悔しかけていたが、もはや迷いはない。

是が非でも入学の権利を勝ち取り、今度は生徒として学ばせてもらおう。

そのためにも

「受験番号71番、遊城九条。ゆうぎくじょう よろしくお願いします」

「今度こそ、世界の広さを教えてあげるーノデス！」

「決闘！」

この決闘、負けるわけにはいかない……！

「先攻は貰ったノーネ！」

僕は後攻、か。先程見た“古代の機械巨人”の性質から考えれば、後攻の方が比較的安全だ。

あの貫通効果に“リミッター解除”などを合わせられたら、簡単に1ターンキルを成立させられてしまう。

だが、此方が後攻なら対処法はまだ残されている。

「手札からフィールド魔法“歯車街”を発動！

……更にフィールド魔法をセットし、“歯車街”を破壊」

……！ フィールド魔法を自分で破壊した？ 一体、何のために……

「何だ？プレイングミスか？」

「試験官でもあんな失敗するんだね」

「クロノスがあんな初歩的なミスを？」

「いや、あれは……」

外野もざわついている。

当然だ。フィールド魔法を自分から率先して破壊することなど、ほとんど皆無といっていい。

複数種類のフィールド魔法を採用しているなら別だが、それでもこんな貼り替えは不自然だ。

つまり、能動的に破壊する意味は他にある。

「“歯車街”が破壊された時、自分の手札・デッキ・墓地から“古代の機械”と名のついたモンスター1体を特殊召喚することが出来るノーネ」

破壊がトリガーになるタイプか！？

「私はデッキから、“古代の機械巨竜”を特殊召喚！

更に伏せていた“歯車街”を発動！このカードが存在する限り、“

古代の機械”と名の付くモンスターの召喚に必要なリリース数を1体減らすことが出来るノーネ！

更に更に、手札を1枚捨てて魔法カード“コストダウン”を発動！

手札のモンスターのレベルを2つ下げ、“古代の機械巨人”を召喚！最後にカードを1枚伏せてターンエンドなノーネ」

流れるような動作でクロノス教諭の手札は全て無くなり、代わりに

場には攻撃力3000のモンスターが2体並んでいた。
これは酷い。

周囲から「あいつ終わったな」だの「いくら何でも可哀想」などと聞こえてくるが、全くもってその通りである。

手を抜かないその姿勢は素直に尊敬出来るものだが、少々本気過ぎはしないだろうか？

これをひっくり返せとは、正直言って無茶だろう。まあ、やるしかないわけだが……

「僕のターン、ドロー」

……！これなら……いや、あの伏せカードが何かによる。

しかし、どの道これ以外にとるべき方法はない。

止められたのなら、それは自分がその程度だったというだけの話だ。そもそも、元は中学浪人に過ぎぬ我が身。既に一度散った身の上だ。ならば何を恐れることがある。

「手札から魔法カード“闇の誘惑”を発動。デッキからカードを2枚ドローし、その後、手札の闇属性モンスター1体を除外する。

……“冥府の使者 ゴーズ”を除外」

「“ゴーズ”を除外だと？」

「馬鹿なヤツだ。自分のカードの効果も理解出来ていないらしい」

散々言われているようだが、気にしている余裕はない。

「手札から永続魔法“神の居城 ヴァルハラ”を発動。

自分の場にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚することが出来る。

手札より“墮天使ゼラート”を特殊召喚」

自身の場に、闇に堕ちた大天使が降臨する。

最上級モンスターなだけあって、その威圧感はクロノス教諭の“古代の機械”に勝るとも劣らない。

「いきなり最上級モンスターを召喚するとは、なかなかやるノーネ。よく出来ました。」

しかし、私のモンスターは2体共に攻撃力3000。そのモンスターじゃ届いていないみたいなノーネ」

“墮天使ゼラート”の攻撃力は2800。僅かではあるが、確かに足りない。

しかし、このカードの本質は能力値ではなく

「“墮天使ゼラート”の効果を発動。手札から闇属性のモンスターカードを1枚捨てることで、相手の場のモンスターを全て破壊する。……“ネクロ・ガードナー”を捨てます」

「なんですート!?!」

相手モンスターへの除去効果。“古代の機械”に破壊耐性は無かつたらしく、実にあっさりと破壊することが出来た。

この効果を発動したターンの終了時に、“墮天使ゼラート”は墓地へ送られてしまうが、今は関係ない。

クロノス教諭の場がから空きの今、この好機を生かし勝負を決める！

「手札から装備魔法“D・D・R”を発動。手札を1枚捨てることで、除外されているモンスター1体を自分の場に特殊召喚する。

……僕は当然、“冥府の使者 ゴース”を召喚」

「最上級モンスターが2体並んだ……」

「“ゴース”を除外したのはこのためだったのね」

「流石は九条だぜ！やっぱリスゲー！」

「相手フィールドを制圧しつつ、モンスターを展開……あれが君の言う一番か？」

「フ……良い決闘者だ」

ここまでは順調だが、まだだ。まだ足りない。

実技担当最高責任者ともあるうお方が、何の保険も用意していないはずがないのだ。

あの伏せカード。あれの正体如何によつては、この優位な状況も一転して窮地となりうる。

「な、なかなかやるノーネ。

（しかし、私の伏せカードは“聖なるバリア ミラーフォース”。攻撃してきたら、まとめて吹き飛ばしてあげるーノ德斯）」

確証は無いが、あの伏せカードは攻撃反応系の罠カード。

事実はどうであれ、そう想定した上で動くべきだろう。

そして、それを乗り越えた時、アカデミアの門は開かれるのだ。

幸いなことに、そのために必要なカードは揃っている。

「場の“ゴーズ”をリリースし、手札から“天魔神 インヴィシル”を通常召喚」

「せっかく出した“ゴーズ”を!？」

「所詮はドロップアウトか。あれでは無駄に手札を消費しているだけだ」

“天魔神 インヴィシル”。

レベル6の上級モンスターでありながら、攻撃力2200と少々物足りない能力値のモンスター。

だが、その効果は目を見張るものがある。

「天魔神 インヴィシル」は、自身を召喚する際にリリースしたモンスターによって異なる効果を得る。

リリースした“冥府の使者 ゴーズ”は闇属性・悪魔族…… よって、畏カードの効果が無効化されます」

「ナっ!？」

「終わりです…… 2体のモンスターでダイレクトアタック」

クロノス教諭のライフが0になると同時に、試験終了のブザーが鳴った。

結果だけ見れば後攻1ターンキル。しかし、その内容はあまりにお粗末なものである。

所詮は手札に恵まれていたという幸運が前提にある勝利。運もまた

実力ではあるが、到底納得出来たものではない。
クロノス教諭の伏せカードが“奈落の落とし穴”や“天罰”、“我が身を盾に”のようなものであったのならば、間違いなく負けていた。

否。クロノス教諭が本当の意味で本気であったのなら、きっと手も足も出せず終始圧倒されていたに違いない。

考えてみれば当然だ。あくまでこれは試験に過ぎない。

全力を出しているように見せておきながら、その実、相手が乗り越えられる限界点を見極め、それに合わせた決闘を行う。

実技担当最高責任者という肩書きに恥じぬ、正に凄まじい手腕。自分など及ぶどころか、想像すら出来ぬ程の領域にいる。

弟に、十代に改めて礼を言わなければならない。

十代が誘ってくれなければ、自分は此処にいないのだ。

そうであったならば、それは一生涯の内で最大の損失となっていたことだろう。

何故か全く動きの無いクロノス教諭に深々と一礼し、僕は十代の下へ急ぐのだった。

二話目：出会い

/

デュエルアカデミアは、太平洋上に浮かぶ絶海の孤島に建設された、次代のデュエルエリート育成を目的とした、全寮制の教育機関である。

そのネームバリューは凄まじく、毎年数多くの夢見る若きデュエリスト達が受験し、そして、大半が散っていく。

そんな狭き門を突破した者達は、各々の能力に合わせ更に3つのコースに厳格に分けられる。

中学からの成績優秀者が在籍する、真のエリート組“オベリスク・ブルー”。

中等部出身者と、高等部からの編入組が在籍する“ラー・イエロー”。

そして、それ以外の所謂落ちこぼれと言われる生徒が集まる“オシリス・レッド”。

何とか合格を果たした僕と十代は、“オシリス・レッド”に配属されることとなった。

当然の帰結である。自分の筆記試験の結果は、悪くはないが良くもない実に平凡なもの。

一応、試験官を務めたクロノス教諭に勝利を収めた形になってはいが、それも教諭の卓越した技能による絶妙な手加減があつてこそだ。

あれが自分の真の実力などと、胸を張ることが出来るはずがない。

「どうして君達が“レッド”なのか、不思議だよ」

“ラー・イエロー”に所属する、筆記試験1位の男はそう言っていたが、クロノス教諭のような優秀な指導者を有するアカデミアが、生徒の実力を見誤るとは考え難い。

自分の実力が“オシリス・レッド”と判断されたのならば、それが真実なのだろう。

いや、待て。ただそれだけの理由はずがない。

筆記試験の結果が奮わなかったとはいえ、高い潜在能力を持つ十代も“オシリス・レッド”なのだ。

十代の才能は、素人目に見ても他と隔絶した域にある。

それこそ、規則さえ無ければ即座に“オベリスク・ブルー”に配属されてもおかしくない程に。

自惚れるわけではないが、自分もまた十代と同等か、それに近い実力を有するという自負はある。

アカデミアの生徒は競争を勝ち抜いてきたその性質上、ある程度の実力は保障されているが、それでも大抵の相手に遅れをとることはないはずだ。

そこまで考え、己の傲慢さに愕然とする。

自惚れるわけではないなど、どの口がほざくのか。

十分に自惚れている。傲っている。

知らぬ間に“オシリス・レッド”を格下と軽んじるとは何様のつもりか。

自分は上等な人間だ。などという間違った認識に酔い、優越感に浸

りたかったとでもいうのか。

自覚無き悪意は、自覚した悪意と比してなお忌避すべきものである。
やはり、というべきか。自分は最低な人間だ。

愚鈍で、愚劣で、そのくせ下らぬプライドだけは一丁前の、救いようのない愚物である。

ああ、なるほど。確かに實力だけが寮を決定する条件というわけではないらしい。

真に優れた決闘者は、決闘を通じて相手の心の奥底まで垣間見ることが出来ると聞く。

故に、クロノス教諭は見たのだろう。

穢れきったこの心の内を。自身が無意識に目を背けていた唾棄すべきものを。

そんな、誰もが軽蔑するであろう自分のような存在がここにいないのは、本来ならば望ましいことではないはずだ。

にもかかわらず、自分がアカデミアに入学出来たのは、クロノス教諭のおかげであろう。

彼はこの醜悪な内面を叩き直すべく、敢えて入学させたのだ。

切り捨てればそれで済む。しかし、それではいつかこの穢れは害威となり、その矛先は罪無き者に向けられるやもしれない。だからこそ更正させる道を選び、その意図を自ら悟らせるために“オシリス・レッド”に配属したのだ。

決して優れた頭脳を持つとは言えない、むしろ劣悪な部類の自分にも、これだけは間違いないと断言出来る。

否、この程度なはずがない。

クロノス教諭は至高と呼んで差し支えないほどに完成された、正しく理想の教育者である。

自分ごとくではまだまだ及びもつかぬほどに深い意図が隠されているに違いない。

自分には“オシリス・レッド”で十分。否、それでも過ぎたものなのだ。

アカデミア全生徒の最下層。それが自分。それこそが真実だ。きつと十代は、こんな自分と双子であつたが故に“オシリス・レッド”なのだろう。

自分さえいなければ、少なくとも“ラー・イエロー”、もしかしたら特例で“オベリスク・ブルー”だったかもしれない。いや、十中八九そうだろう。それだけのものを十代は秘めている。

「……………すまない、十代。とても謝つて済まされることではないが、謝らせてくれ」

許されるとは思っていない。

十代はアカデミア入学を本当に楽しみにしていたのだ。

自分は、それに傷を付けた。罵詈雑言を浴びせかけられ、この世のありとあらゆる苦痛を与えられて尚、許されていいものではない。

「？ 何かよく解んないけど、あんまり気にすんなよ。

それにしても赤かぁ！……燃える炎、熱い血潮。最高だぜ！」

実にあっさりと自分を許したばかりか、気にするなと慰めの言葉ま

で……本当に、自分などには過ぎた弟である。

改めて謝罪と礼を言わねばと向き直ると、十代は建物に向かって走り出していた。後にメガネの少年　丸藤翔も続いている。

何事かと思いいいで後を追うが、建物の内部は意外と入り組んでおり、なかなか追いつけない。

目的地が解らないのもあって、いつ見失ってもおかしくない状況だ。この時、愚かにも自分は失念していた。

車は急に止まれない　走っている人間もまた然り。

「え？　きゃっ」

し字通路の角、ちょうど互いに飛び出す形。

被我的距離はごく僅か。目測で既に1メートルを切っている。

このままでは正面衝突は必至。猶予はどんなに多く見積もっても1秒にも届かない。

が、手詰まりだと諦めることを状況が許さない。

自分と今にもぶつかりそうになっているのは、制服から考えて女生徒。

実は特殊な性癖の男だというドンデン返しでもない限り、骨格、筋量、体格差の関係で怪我を負わせてしまう可能性が非常に高い。

相手側が歩いていたことと、そして突然の出来事に動きが止まったのは不幸中の幸いか。

少なくとも、下手に動かれるよりは対処は遥かに容易だ。

既に踏み出し始めている右足を止めることなく、敢えてより強く踏み込む。

この時点で被我の間合いは10センチを切り、殆ど接触距離と同義となった。

衝突の際に発生する衝撃を予想してか、女生徒がとつさに目蓋をキック閉じ　この身はその予想を、外す！

全体重をかけた踏み込みによつて限界まで溜めた力を、正に一瞬で解き放ち真横に跳ぶ。

俯瞰して見れば、通路と同じし字形。女生徒から急速に離れながら、直角に移動したのが解るだろう。

そうして、女生徒の安全を確保出来たことに安堵しつつ　やたら堅牢な壁へ無駄に勢いよく衝突したのであった。

/

ぶつかりそうになった女生徒は、天上院　明日香さんというらしい。

背中まで伸びた金砂の髪に、驚くほど端正な美貌。

更に同年代とは思えぬ抜群のプロポーションを兼ね備えた、自分の短い人生の中では未だ出会ったことのない、紛れもない美女であった。

ちなみに、当然のことながら女性である。

そんな女性と会話をかわしているという現状は、自分の中では人生最大級の大事件だ。

そもそも、自分は異性との接点が少ない。

パツと思ひ致るのが、幼稚園の頃に何故か仲が良かったユキちゃん（当時4歳）のみ、という時点でお察し下さいといったところだ。

無論、原因は己自身にあるのは解っている。

何に対しても積極的で、いつも明るく活潑な十代と比べるまでもなく、自分は　遊城九条は、積極性に欠け、端的に言ってしまうば暗い人間だ。

更に言うなら、根暗である。

更に追加するならば、ただそこにいるだけで場の空気を重苦しいものに変え、面白い冗談が言えるわけでもなく、特別興味を引くような特技も持たない、クラスでグループ分けを行った際には先ず最初に除外され、最終的に入れてもらったグループ内では不良債券扱いされる　そんな人間だ。

少なくとも、一緒にいて愉快どころか不快に感じる相手と関わろうとする、そんな稀有な人物はそうそういるものではない。

そういった意味では、この天上院　明日香という女生徒は非常に珍しい部類だと言える。

単純に先入観を持っていなかっただけにしても、彼女にとって自分はいきなり目の前に突進して来たあげく、よく解らないうちに壁に激突し悶えていた変人だ。

凡そ考え尽く中で、とても優良と分類可能な第一印象ではない。はつきり言って、そのまま関わり合いにならぬよう迅速にその場を離れ、全てを記憶から消し去っても許されるレベルである。

それでも、彼女は自分に話かけ、自滅した此方の身まで案じてくれたのだ。

外見のみならず、内面もまた救いの女神のように美しく清らかな女性である。

そんな女性と楽しく談笑出来るなど、つい数分前までは考えてもいなかった。

デュエルアカデミアは、言うまでもなく勉学に励むべき場所である。そこに異論反論は皆無であるし、自分は特にしっかりと学ぶ必要があることは理解しているが、それでも、これくらいの役得は許してほしい。

彼女のような人間と自分が話す機会など、一生に一度あるか無い程度だろう。

だからせめて、せめてこの一瞬だけは

「それにしても、クロノス教諭に勝つなんて凄いわ。しかも、１ターンキルなんて」

「運が良かっただけです。プレイングも穴だらけでしたし、とても手放しに誉められる内容ではないかと」

「それでも、貴方は勝った。この事実是不変わらないわ。もつと自信を持ってもいいと思うけど？」

「恐縮です。……しかし、自分はそのような評価に値する人間ではありません」

「もう、頑固ね。……ところで、その口調は何かならないのかしら？」

同学年だし、敬語で話す必要はないと思うんだけど」

「すみません、性分なもので」

十代と話す時や、決闘中ならそれなりに砕けた口調で話せるのだが、やはり異性相手、しかも初対面では勝手が違う。というか、吐き気を催す程度には緊張している。

だが、これは仕方がないことなのだ。同年代の異性とまともに会話を行うなど、それこそ10年ぶりなのだから。

あったとしても「あ、床を掃くから椅子上げるの手伝って」くらいのものである。ちなみに教室掃除での一コマ。

僕の言葉に何故か急に笑い出す天上院さん。

口元を抑えクスクスと笑う姿も綺麗だが、笑っている理由がイマイチよく解らない。

いや、まあ、彼女が楽しいのならば自分は一向に構わないのだが。

「ふふ……ごめんなさい、何だかおかしくって。

あ、もうこんな時間……もう直ぐ新入生の歓迎会が始まるわ。残念だけど、そろそろ行かないと」

もうそんな時間だったのか……楽しい時間というのは、本当に矢のように過ぎ去る。

出来ることならば歓迎会など無視してしまいたいくらいだが、そうもいかない。

「それじゃあね、九条。またお話ししよう」

「はい、また機会があれば」

その機会は、きつと訪れることはない。

同じ場所に通っているとはいえ、自分と彼女は本来ならば住む世界が違う人間だ。

今回のような偶然は、そう何度も起こることはないだろう。そもそも、彼女の言葉は社交辞令の域を出ないものだ。

一晩眠れば、自分のことなど綺麗さっぱり忘れてしまつに違いない。

そんな至極当然の諦観と、僅かばかりの寂しさを感じつつ、僕は一人“オシリス・レッド”寮へと帰るのだった。十代達のことを完全に忘れて。

三話目：前振り

/

端的に言って、レッド寮の新入生歓迎会は非常に質素であった。本日のメニューは白米と味噌汁に焼き魚、それに漬け物。

ブルー寮ではフルコースが出るという話なので、その格差は凄まじいものがある。同じ学費でこの違いでは、多少の文句を言いたくなるのも致し方ないのかもしれない。

もつとも、自分と十代は全くと言っていいほど気にしていなかったが。

十代は質より量派の何でも食べる健啖家であるし、自分は胃に入れば全て同じという考えの人間である。2人揃って味に殆ど頓着しない性質のためか、不平不満をぶちまける周囲の空気などどこ吹く風。それに、寮の建物や食事の格差も、所謂ハングリー精神などを養うためのものなのだろう。

人間誰しも、飢餓状態に陥れば本気になるものだ。その飢えが、渴きが、成長のための源となる。

早い話が馬の目の前に人参をぶら下げるようなものだ。待遇改善を求めるならば、さっさと実力を付けて上の寮に上がれ。ということだろう。

「九条、食わないんだったらそのメザシ貰うぜ！」

いつの間にか自分の分を食べ終わっていた十代が、間髪入れず僕の皿からメザシを奪う。

相変わらず本能に忠実な行動をする弟であった。事あるごとに小難しく考え込んでしまう自分と違い、実に清々しい性格である。

「あ、アニキ……九条君、おかず無くなっちゃったけどいいの？」

「いつものことなので」

それに十代は自分のせいでレッド寮にいるのだ。この程度のことでは詫びにならないが、それでも何もしないよりはマシだろう。

これで自分の食事は更に質素になったが、別段気にする程のことでもない。

メザシとて仏頂面の暗い男よりは、実に美味そうに食べてくれる十代の糧となることを望むだろう。

ことの始まりはその少し後。

新人生歓迎会が終わり、自室で予習がてら教科書を読んでいた時のことである。

ノックも無いままいきなりドアが開いたと思えば、十代が今から外に出ようと言いだしたのだ。

理由を問いただしてみれば、何でもオベリスク・ブルーの生徒とアンティールで決闘を行うらしい。

「夜間外出もアンティールも校則違反だと思うが……」

「でも決闘者として、売られた決闘を買わないなんて出来ないだろ！？」

既に行く気満々の十代を何とか説得しようと言葉を選んでいる時、

突如として一つの仮定が頭を過ぎる。

そう、校則違反なのだ。しかもバレたら退学させられてもおかしくないレベルの。

そんな危険な橋を、気に入らないなどという下らない理由で、エリート組たるオベリスク・ブルー生が渡るだろうか？

より詳しい話を聞けば、相手はエリートの中でも更に優秀な人間のようにだ。リスクを理解出来ないはずがない。

加えて、オベリスク・ブルーの寮長はあのクロノス教諭である。ブルーに所属しているということは即ち、彼が認めた人材ということだ。

特別な理由も無いまま校則違反を行うなど、有り得ないと言っている。

ここから導き出される結論は一つ。

この決闘は、学園側、正確にはクロノス教諭公認だ。

きっと、本来ならばオベリスク・ブルーに所属出来ていたはずの十代に、何とかいち早くブルー生と決闘をさせてやるべく、このような手段をとったのだろう。

そして、十代はほぼ間違いない僕を、遊城九条を誘ってやって来る。十代にブルー生と決闘をさせ、その上で自分にそれを見せて奮起させるのが目的に違いない。

正に一石二鳥とはこのことか。否、自分が理解出来ていないだけで、実際にはそれ以上の効果があるのだろう。

クロノス教諭の多大な気遣いと、嫌な役回りを負わせる形となった

ブルー生のことを思うと些か心苦しいが、ここで申し訳ないからと十代を引き止めてしまえば、それは彼らの厚意を無駄にすることとなる。

なればこそ、自分は十代と共に向かわねばならない。

生きていれば、規則以上に優先させるべき事態に遭遇することもある。それが今なのだ。

「行こう、十代。あまり待たせるのは失礼だ」

「ああ。行くぜ、九条！」

こうして、指定された決闘場へとやって来た僕は、十代とブルー生の決闘を、一緒に着いて来た翔と共に観戦することとなったのである。

ブルー生　万丈目というらしい　今回は悪役に徹するらしく、終始一貫して高圧的な態度を崩すことなく、挑発を繰り返していた。その演技は目を見張るものがあり、事情を理解していなければ、性根の腐った男だと本当に誤解していたかもしれない。

というか、彼はもしか、あの万丈目グループの御子息なのだろうか？だとすれば、あれほど堂に入った演技が出来ているのにも納得がいく。

彼は生まれたその瞬間から、経営者一族の末席に名を連ねているのだ。そのような立場の人間は、当人の本来の気質に限らず、立ち振る舞いを変えねばならないこともある。

故に、自然とある程度の演技力が備わっていくのだろう。

そんな彼は、この場で悪役を演じ切ることが出来るだけの技量を有

する。

わざわざ悪役を演じる必要などないのでは？と、一瞬考えたが、それは違う。

悪役 即ち、嫌悪を感じさせる相手だと思わせることで、この氣遣いを悟られぬようにしたのだ。

嫌悪を感じる相手のことをより深く知ろうなどとは、普通の神経の者ならばまず考えることはない。

だからこそ、真実は闇に消えるはずであつた。

これはおそらく、彼方側からの純然たる厚意によつての行いで、自分と十代に負い目を感じさせないための策。

自分は気付いてしまったが、本来この事実は自分と十代が知ることではなかつたものだ。

ならば彼らの厚意を無駄にしないためにも、この件については気付いていないふりをするのが正しい判断だろう。

礼は後日改めて。可能であれば、出来る限り自然な形でそれとなく。

そう内心で決意を固めた丁度その時、自分にとってあまりにも予想外な人物が姿を現した。

いつの世でも出会いは唐突で、再会もまた同様である。

もう二度と関わることはないと確信を持っていた相手 天上院さんがそこにいた。

/

そして始まった十代と万丈目の決闘は 深夜の見回りを行っていたガードマンの登場によって中断、という結末を迎えた。

早々に万丈目達ブルー生が立ち去ったことから推測するに、ガードマンに今回の件は伝えられていなかったようだ。やはり学園側としては、特定の生徒に肩入れしている、というような事実を残すわけにはいかなかったのだろう。

「イヤだ！ 俺はここを動かない〜！」

決着をつけられなかったことが不満なのか、駄々をこねる十代を担ぎ上げ、素早く離脱。

ジタバタと暴れる人間を抱えて走るのはなかなかの重労働であったが、何とか建物の外まで来ることが出来た。

「それでどうだった？ オベリスク・ブルーの洗礼は」

一息ついて、天上院さんが未だに不機嫌そうな十代へ問いを投げる。どうやら天上院さんには、今回の件の真実は伝えられていないらしい。

当然のことではあるが、やはり一部の者しか知らないようだ。

「まあまあ、かな。もう少しやると思ってたけどね」

「そうかしら？ 邪魔が入っていなかったら、今頃アンティールで大事なガードを失うところじゃなかったの？」

十代の言葉をただの強がりと判断したのか、天上院さんはからかい混じりの微笑を浮かべる。

自分も彼女と同じ見解だ。あのまま続けていれば、十代が負けていた可能性は高い。

もつとも、アンティルルに関しては冗談の類だというのは確定的に明らかであるため、彼女の言うような事態は起こり得ないのだが、それに対し、十代は不敵な笑みを浮かべる。

「いや今の決闘、俺の勝ちだぜ」

そう言っ取り出したのは、十代が先程の決闘で最後に引いたカード“死者蘇生”。

なるほど、これならば確かに逆転の一手と成り得る。……というか、よくあのタイミングで都合の良いカードを引けるものだ。

これこそが十代が非凡である理由の一つだと理解してはいるが、それ以上にその出鱈目さ加減に呆れてしまう。

天上院さんの表情が驚き染まったことに満足したのか、十代は足早に寮へと帰って行く。その直ぐ後ろに、翔が続いた。

自分も戻らねば と、それでは天上院さんを一人取り残してしまふという事実には思い至る。

正直、自分と彼女は特別親しい間柄というわけではない。

現在の時刻は深夜0時を過ぎ、既に女性が一人出歩いて良い時間ではないが、此处はデュエルアカデミア。最低限の安全は確保されて

いる。

ならば、送って行かずとも問題は無いはずだ。
そもそも、親しくないどころか殆ど知らない相手に送ってもらおう
など、彼女も思っまい。

それが自分のような人間ならば、尚更。

この場は別れの意を伝え、早々に去るのが得策だろう。
それが双方にとって最良の「ちよつと、聞いてる？」

いきなり肩を揺すられ、僅かな驚きと共に思考が現世へ帰還を果たす。

どうやらまた、小難しく考え込んでしまうという我が悪癖が出てしまったようだ。

相変わらずではあるが、いつまで経っても成長しない。帰ってから改めて、今一度猛省しなければ。

しかし、今は天上院さんだ。何やら自分に用事があるらしい……全く思い当たる節など無いのだが。

「もう……無視するなんて酷いわ。何度も呼んだのに」

「すみません……考え事をしていたもので」

貴女を送って行くべきか否かで。

「ところで、ご用件は何でしょうか？」

「え？ ああ、大したことじゃないんだけど……」

しばしの間。

そんなに言い出し難いことなのかと、思わず身構える自分。

「少し、歩かない？」

.....。

はい？

「ほら、またお話ししようって、約束。まさかもう忘れちゃった？」

「いえ、それは覚えていますが……」

数時間前のことである。

それをこの歳で覚えていないとしたら、それは病気が障害を疑うべきだろう。

「だったら決まりね！ どうせ途中までは同じ道だし、話相手が欲しかったのよ」

決定したらしい。自分の意思がまるで考慮されていないが、気にしないことにする。

非常に貴重な異性の知り合いなのだ。

会話を楽しむ機会に恵まれたのならば、それを感じしても罰は当たるまい。

そう自分を納得させて、2人で他愛もない会話を楽しみながら帰路に着く。

自分と彼女の接点は、吹けば一瞬で消えて無くなる程度のもの。

前回も今回も、天文学的確率で起こった何かの間違いに過ぎない。
だから、残念だと思うこと自体がそもそもの誤りだ。

何故ならこの邂逅は、きっと有り得ぬ奇跡のようなものなのだった
のだから。

/

後から思い返してみれば、これがあの事件の壮絶な前振りだった
のではないかと、思えてならない。

もともと、それは所詮こじつけに過ぎないし、だから何が変わると
いうわけでもない。

何にせよ、解ったことが一つ。

紡いだ縁は、そう易々と切れることはないらしい。

四話目・自信（前書き）

今回、あとがきにてアンケートがあります。
興味がある方は答えてみて下さい。

四話目：自信

/

十代と万丈目の決闘から一夜明けた本日、ついにデュエルアカデミアでの本格的な授業が始まった。

授業は一学年合同で、内容も全て統一されるらしい。

各寮における成績の差を考慮すれば、寮毎に教室を分けるくらいのこととはすると思っていたので、少しかり意外である。

実力的に近い者達ならばいざ知らず、全寮合同の授業にさほど利点があるとは思えないのだが。

教室が一つで済むというのは利点と言えなくもないが、それも理由としては弱い。

いや、大事なことを失念していた。アカデミアには、寮の昇格や降格が存在するのである。授業内容や進行などに差異があれば、寮を移動した生徒にとって不都合が生じるやもしれない。

つまりこれは、生徒達への負担を極力減らすための処置なのだろう。更には、日頃から成績優秀者の姿を見せることで向上心を刺激し、適度に競争心を煽る。

実によく考えられたシステムだ。先程の浅慮な自分が恥ずかしい。全て、そう全ては生徒のことを思えばこそなのだ。自分の件からも解っていたことではないか。

実力主義を謳ってはいるが、アカデミアは誰一人として見捨てない。全ての生徒に手を差し伸べ、等しく機会を与える。それを生かすも殺すも己次第だ。

そういつた学園側の意図を差し引いても、この形式は自分にとって非常に望ましいものである。

何せ、あのクロノス教諭の授業を受けることが出来るのだ。

クロノス教諭の授業は、オベリスク・ブルーに所属しなければ受けられないと思っていたが、これは嬉しい誤算である。

これで文句があるはずがない。

そして、全寮合同ということは当然、オベリスク・ブルーの女生徒も同じ教室にいるということになる。

それはつまり、彼女　天上院さんもまた此処にいるということでもあった。

もつとも、同じ教室だからといって話す機会など早々あるはずもないので、関係ないといえば関係ないのだが。

そんな彼女は現在、クロノス教諭からの質問に答えていた。

……凄まじく余談ではあるが、よくあれだけの長台詞を一切の澱み無く言えるものだ、思わず感心してしまう。

「ベツニーシモ！　非常によろしいーノ！　オベリスク・ブルーのシニョーラ明日香には、優し過ぎる質問でしたーネ」

「基本ですから」

凡そ考えられる中で完璧と言える解答に、クロノス教諭もご満悦だ。それにいくら基本とはいえ、改めて説明しろと問われると、意外と答えられない類のものでもある。

しかし、そんな言い訳は通じない。

特に自分の場合は人間性が愚劣極まりない分、知識くらいは他者と同等か、それ以上に有していなければならぬ。

「それでは シニョール丸藤」

「は、はい！」

「フィールド魔法の説明を、お願いしますーノ」

己の未熟さを再認識している間も授業は進む。

反省は後からでも出来る。鉄は熱いうちに打つべきだが、今回ばかりは授業に集中するでしょう。

「え、えと、フィールド魔法は……その、えっと」

緊張しているのか、翔は質問の答えに詰まってしまった。その姿に、周囲から野次が飛ぶ。

なるほど、これが噂に聞く可愛がりというヤツか。

敢えて周囲がプレッシャーを与えることで、強靱な精神力を育ませるのが目的だろう。

流石はデュエルアカデミア。一般生徒からして素晴らしい人間性の持ち主が揃っている。

頑張れ、翔。負けるな、翔。その重圧に打ち勝てば、お前は大きく成長出来る。

自分の心中の声援もむなしく、そのまま翔は俯いてしまった。

「気にすんな。落ち着けよ、翔」

十代が慰めの言葉をかけるが、翔は顔を上げようとしない。

「よろしい。引っ込みなさいノ。」

……基本中の基本も答えられないとは、流石はオシリス・レッド。
驚きですーノ」

クロノス教諭の嘲るような言葉を聞き、周囲が嘲笑で包まれる。

一見、教諭が率先して虐めを行っているようにも見えるが、それは誤りだ。

この流れは、レッド寮の生徒を奮起させるためのもの。

教諭は自分が悪役になることで、やる気を出させようとしているのだろう。

「でも先生、知識と実践は関係ないですね？」

そんな中、突如として十代が口を挟む。

「だって、俺と九条もオシリス・レッドですけど、先生に決闘で勝つちゃったし！」

集まる周囲の視線。

Vサインをし、満面の笑みを浮かべる十代。

「ヌウウウ……マンマミーア！」

それに対し、ハンカチを噛み締め、悔しそうな態度を露わにするクロノス教諭。

まさに迫真の演技であった。十代のこの反応すら、織り込み済みだったに違いない。

レッド寮には劣等感を持つ生徒も数多く存在する。そんな生徒達を腐らせぬよう、自分と十代という例を提示させたのだ。

例えレッド寮であったとしても、教諭に勝つことでさえ絵空事ではないのだ、と。悔しそうな顔をしたのも、十代の言葉により真実味を帯びさせるためなのだろう。

もつとも、十代はともかく、自分の勝利はクロノス教諭の絶妙な手加減あってこそのもだったのだが。

その後も授業は続いたが、翔はしばらく落ち込んだままであった。些か精神的に打たれ弱過ぎると思っただが、それは裏を返せば心根が優しいということでもあるのだ。

まだ短い付き合いではあるが、それが翔の美点だということは十分に理解出来ており、好ましくも思っている。

微力ながら、自分の方でも何かフォローを入れておくべきか　と、考えていたのだが、いつの間にやら自力で立ち直っていたようで、何だか肩透かしを食わされたような気になってしまう。

しかしながら、翔が元気になったのならば、それが最良の結果である。

やたら挙動不審で、時折急に笑顔になるなど不可解な点はままあるが……まあ、問題あるまい。

おそらく、何か良いことでもあったのだろう。

茶柱が立ったとか、そういう類のことが。

/

だからこそ、翔が攫われたという十代の言葉は、自分を激しく動揺させた。

よく解らないが、翔は女子寮に捕らえられているらしい。何故そうなる。

考えるのは後回しだと十代に急かされ、やって来たるわオベリスク・ブルー女子寮。

昨夜の件はクロノス教諭らのご厚意であつたため黙認されていたが、今回は紛れもない校則違反。

しかも深夜に男子禁制の女子寮へ侵入するなど、即刻退学を言い渡されてもおかしくはない　　というか、普通そうなって当然である。

しかし、だからといって翔を見捨てることは出来ない。

理由は全く解らないが、女子寮に捕らえられているということは、翔もまた退学の危機に晒されているのだ。

出来ることなら助けてやりたいし、可能ならばそうするべきだろう。

……十代共々、一網打尽にされて終わる気がしないではないが、それでもやらずに後悔するよりずっといい。

そうして、指定された場所に待っていたのは、拘束され身動きのとれなくなっている翔と、その隣に立つ三人のオベリスク・ブルー女子生徒。

その内の一人は、何と天上院さんであつた。直に会うのは、これで既に三度目である。

全く持つて彼女も運が無い。

如何に彼女の心が清らかだとしても、こう何度も自分のような者に遭遇すれば氣分を害するだろう。

「アニキ！ 九条君！」

「翔！ 一体これはどういうことだ！？」

激昂する十代に対し、天上院さんの傍に控えていた二人は翔が女風呂で覗きを行ったと告げる。

それが事実ならば、翔は確実に退学だ。ちなみに、自分と十代も状況的に退学確定なのは言うまでもない。

しかし、覗きとは。おそらく誤解なのだろうが、このまま汚名を晴らさねば翔が社会的に抹殺されかねない。

ここはやはり、自分が土下座すべきだろうか？

現実問題として、この場で翔の無罪を証明するのは難しい。ならば、敢えて罪を認めた上で、情に訴えるのが効果的な方法だろう。

このデュエルアカデミアにおいて最底辺に位置する自分が、地に平伏し土下座を行えば、憐れみと共に赦してくれるかもしれない。

……いや、それは都合良く考え過ぎか。自分の安い頭一つで何とかなるなど、凄まじい自惚れである。

「ねえ九条、私と決闘しない？ もし私に勝てれば、風呂場覗きの

件は大目に見てあげるわ」

己の矮小な頭脳をフル回転させ、翔を救う方法を思案していると、天上院さんがそんなこと言ってきた。

決闘でケリを着ける、というのは何ともデュエルアカデミアらしい流れではあるが、何故自分なのだろう？

そもそも、自分は十代に連れて来られただけのおまけである。この場で決闘を申し込むならば、十代が妥当ではないだろうか。

「貴方の实力を知るのに丁度良い機会だと思ったのよ。それで、どうするの？」

「やれよ九条！ 決闘者なら、売られた決闘は買うもんだ！」

十代の言葉を聞いた瞬間、全ての点は繋がり、一本の線となった。

そう、つまりそういうことなのだ。

本来ならば、即座に守衛に突き出されていてもおかしくはない翔が拘束されるに留まり、更に破格といえる交換条件を提示する天上院さん。

そして決闘好きの十代が、自分に決闘を受けるよう薦めてきた事実。

これらから導き出されるのは唯一つ 自作自演。

この場にいる面子は、自分以外は全員グルなのだろう。

こんな手の混んだことをする理由はおそらく、自分に自信を持たせるため。

前回、前々回と、天上院さんと会話した際に度々「自信を持て」と言われていたのだ。

心優しい彼女は、自分と決闘を行わせることで自信を付けさせようとしているのだろう。

翔を人質にしたのは、切迫した状況を演出することで自分を本気にさせ、尚且つ人を助けたという結果を齎すため。

ああ、本当に自分は恵まれている。恵まれ過ぎている。

天上院さんは直に会うのは今回で僅か三度目であるし、傍に控える二人に至っては初対面。

翔は実に不名誉で損な役回りを押し付けられ、十代は至らぬ兄のせいで巻き込まれたのだ。

自分に自信を付けさせる。それだけのために、これだけの者達が限られた時間と労力を割いてくれている。

皆の心遣いを無駄にしないためにも、ここは決闘を受けるべきだろう。

「了解しました。やりましょう」

「ええ」

僕の言葉に、天上院さんは満足げに頷いてボートに乗り込んだ。騒ぎを聞きつけられぬよう、湖上に移動するらしい。

……足場が不安定で多少危険な気もするが、誰かに見つかるよりはずっとマシであろう。

そうして、互いのボートを向かい合わせ、決闘盤を構える。
自分に自信を付けさせるといふ目的であっても、天上院さんは手を
抜くつもりはないらしい。

故に、自分もまた渾身の力で挑むべきであり、そして彼女もまたそ
れを望むだろう。

「決闘！」

今回の先行は自分。

そして、天上院さんの戦術については一切情報がない。

「僕のターン、ドロー」

……手札が悪い。モンスターを召喚する手段がない。

「手札から魔法カード“トレード・イン”を発動。“墮天使アスモ
ディウス”を墓地に送り、2枚ドロー」

「いきなり手札交換！？まさか事故っスか！？」

「大丈夫だって、翔。まあ見てろよ」

これで……よし、来た。

「永続魔法“神の居城 ヴアルハラ”を発動。

この効果で、手札から“ダーク・パーシアス”を特殊召喚。“ダー
ク・パーシアス”は墓地に存在する闇属性モンスター1体につき、
攻撃力が100アップする。

カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「お得意のパターンってわけね。私のターン、ドロー！

魔法カード“融合”を発動！手札の“ブレード・スケーター”と“エトワール・サイバー”を融合して、“サイバー・ブレイダー”を召喚！」

！ 融合デッキか？

「バトルよ！ “サイバー・ブレイダー”で“ダーク・パーシアス”を攻撃！」

「っ」 自残LP4000 3900

「更に速攻魔法“融合解除”発動！“サイバー・ブレイダー”を融合デッキに戻し、“ブレード・スケーター”と“エトワール・サイバー”を墓地から特殊召喚！」

いきなりこれ、か。なかなか厳しい。

「“エトワール・サイバー”は、ダイレクトアタックを行う際、攻撃力が600アップするわ。2体でダイレクトアタック！」

「ぐっ」 自残LP3900 2500 700

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。

どうしたの、もう終わり？」

失望を含んだ声に、申し訳なさが込み上げる。

わざわざ自分などの相手をして頂いているというのに、この体たらく。

「流石、明日香様！」

「その調子ですわ！」

「……正直、期待外れだわ。クロノス教諭を破ったのは、貴方の言う通りまぐれだったようね」

随分な過大評価を受けていたらしい。いや、これもリップサービスか。

自分に期待を寄せる者など、そうそういるはずもない。

「九条君！？ あ、アニキ……本当に九条君、大丈夫っすか！？」

「大丈夫だって！ 何たって九条は、俺の兄貴だ。これくらいのピンチ何でもないさ！」

いや、少なくとも一人はいたか。

何の確証も無しに、自分のことを信じる者が。

何故か無条件に自分を慕い、己には過ぎた信頼と讃辞を寄せる弟がいる。

ならば、その期待にだけは応えよう。

それに このまま一方的に負けるのは、少しばかり悔しい。

「……僕のターン、ドロー」

……！ これはまた、何とも都合の良いカードが引けたものだ。どうやらこの身は、悪運だけは強いらしい。

「手札から魔法カード“おろかな埋葬”を発動。デッキから“ネクロ・ガードナー”を墓地に送ります。

更に手札の“ダーク・ネフティス”の効果を発動。自分の墓地に闇属性モンスターが3体以上存在する時、その内2体を除外すること
でこのカードを墓地に送り、次の自分のターンに特殊召喚すること
が出来ます。

……墓地の“堕天使アスモディウス”と“ダーク・パーシアス”を
除外」

「（罨カードで時間を稼いで次のターンまで凌ぐつもり？）
そんな消極的なやり方で、何とかなると思っているの？」

正論である。自分のデッキ構成では、攻めなければ勝機などない。

故に、

「罨カード発動、“闇次元の解放”。除外されている闇属性モンス
ター1体を特殊召喚する。

“堕天使アスモディウス”を特殊召喚」「堕天使アスモディウス”。
攻撃力3000という高い能力値を誇るモンスター。

墓地からの特殊召喚が出来ないため、当初は“ダーク・パーシアス
”のドロー効果で除外し、除外先からの召喚で追撃をかける予定だ
った。

予定とは違うが、何とか召喚にこぎつけられたのは僥倖である。

「“堕天使アスモディウス”は、1ターンに一度、デッキから天使
族モンスター1体を墓地に送ることが出来る。“堕天使スペルビア
”を墓地へ。

そして、バトル。“堕天使アスモディウス”で、“エトワール・サ
イバー”を攻撃」

通るか？

「罨カード発動“ドゥーブルパッセ”！ 相手モンスターの攻撃をダイレクトアタックとしてプレイヤーが受ける！」
何っ！？

「くっ」 相手残LP 4000 1000

モンスターを守った……？

しかし、それだけならば、こんなにリスクの高い罨カードを使う必要はない。

ということは、何か別の

「……“ドゥーブルパッセ”の効果でダイレクトアタックを受けた後、攻撃対象となったモンスターでダイレクトアタックを行うことが出来る」

「そんな！？ それじゃあ九条君は……」

「何て女なんだ、自分のダメージも構わずあんな罨を仕掛けているなんて……！」

「残念だけど、これで終わ「モンスター効果発動」なっ！？」

「墓地の“ネクロ・ガードナー”の効果です。このカードを除外することで、相手モンスターの攻撃を一度だけ防ぐことが出来る」

勝利を半ば確信していた天上院さんの表情が驚愕に染まる。

事実、“ダーク・ネフティス”の効果と、いざという時の保険のためにこのカードを墓地に送っていなければ、今で終わっていた。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「ふふっ」

不意に、天上院さんが笑いだす。

……何かおかしいことをしてしまっていただろうか？

「今のを防ぐなんてね。さっきの言葉、取り消すわ。
やっぱり貴方、強いじゃない」

「」

「だけど、この決闘に勝つのは私よ。

私のターン、ドロー。魔法カード“強欲な壺”を発動！ デッキからカードを2枚ドローするわ」

ここに来てドロー強化。天上院さんの引きもまた尋常ではない。

そしてこのドローで、彼女は確実にこの状況を覆してくる……！

「手札から、魔法カード“機械天使の儀式”を発動！

場の“ブレード・スケーター”と“エトワール・サイバー”をリリースして、儀式モンスター“サイバー・エンジェル 茶吉尼”を特殊召喚！」

現れたのは、最上級の儀式モンスター。

おそらく、彼女のデッキの切り札の1枚。

だが、その攻撃力は2700。“墮天使アスモディウス”には及ばない。

それでも召喚したということは、それは即ち

「サイバー・エンジェル 茶吉尼」の効果を発動！ このカードが特殊召喚に成功した時、相手の場に存在するモンスター1体を、相手が選択して破壊する！

……もつとも、貴方の場のモンスターは1体のみ。よって、“墮天使アスモディウス”が破壊されるわ」

何らかの特殊効果を保有している場合……！

相手に破壊対象を委ねるという点で些か安定感に欠けるものの、強力な効果であることに違いはない。

特に、このようなタイミングで出されるのは非常に厳しい類のもの。為す術無く“アスモディウス”は破壊され、再び墓地へと送られた。

「モンスター効果発動。“墮天使アスモディウス”が破壊され墓地へ送られた時、自分の場に2体のトークンを特殊召喚する。

“アスモトークン”と“ディウストークン”を守備表示で召喚」

「無駄よ！ “サイバー・エンジェル 茶吉尼”は、守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力がその守備力を超えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与えられる！

“アスモトークン”に攻撃！」

！ 貫通効果まで保有するというのか！？

「罠カード発動“ガード・ブロック”。戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドローする」

「くっ（また、仕留め切れなかった）……カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「あー、もう！ サッサと負けちゃいなさいよ！」
「しつこい殿方は嫌われますわ！」

決着が見えて来た。

天上院さんの場には“サイバー・エンジェル 茶吉尼”と、伏せカードが1枚。

対する自分の場には“ディウストークン”と、“神の居城 ヴァルハラ”。

“ディウストークン”は戦闘では破壊されないが、“サイバー・エンジェル 茶吉尼”の貫通効果の前では無意味。

「僕のターン、ドロー。」

そして、効果により墓地に送られていた“ダーク・ネフティス”が特殊召喚されます。

“ダーク・ネフティス”が自身の効果で特殊召喚に成功した時、場に存在する魔法または罫カードを破壊する。
当然、其方の伏せカードを破壊します」

伏せカードは……“リビングデッドの呼び声”。

「だけど、“ダーク・ネフティス”で“茶吉尼”は倒せない。……もう、無理だよ」

「何言ってるんだよ、翔！ まだ決闘は終わってない！」

「でも、アニキ……」

翔の言うことは事実である。

現在、自分の場と手札に“茶吉尼”を打倒する術は無い。

……結局、最後まで悪運任せか。

「手札から魔法カード“アドバンスドロー”を発動。自分の場のレベル8以上のモンスター1体をリリースし、2枚ドローする。

“ダーク・ネフティス”をリリース」

これ以外に無いとはいえ、我ながら分の悪い賭けである。

しかし、焦りや不安は無い。

あるのは心地良い高揚感と

「場の“ディウストークン”を攻撃表示に変更」

「はあっ!？」

「血迷いましたの!？」

“ディウストークン”の攻撃力は1200。だが、今はこれで十分だ。

「そして魔法カード“シャイニング・アブソープ”を発動。

このカードは自分の場に存在する全てのモンスターの攻撃力を、相手の場の光属性モンスター1体の攻撃力分だけ上昇させる。……つまり、

“ディウストークン”の攻撃力は3900」

「何ですって!？」

そう、これで

「僕の、勝ちだ……!!」

「……！」 相手残LP10000

/

「それでは、翔は連れて帰ります」

「ええ、そういう約束だったものね」

仮に自分が負けていても翔は解放されただろうが、それは言わぬのが華だろう。

自分は皆の気遣いを知らぬことになっているのだ。

「ふん！ いい、マグレで勝ったからって調子に乗るんじゃないわよ!？」

「はい、無論です」

実際、勝てたのは完全に運によるものだ。

やはりこの身は未熟の極みである。より一層、精進していかねばなるまい。

「止めなさい、ジュンコ」

「明日香さん……でも!」

「いいから、見苦しいまねはしないで。
……負けたわ、完敗よ」

かなり接戦だった気がするが……いや、彼女にとっては自分ごときに負けた時点で、耐え難い屈辱なのだろう。

例えばそれが、自分に自信をつけさせるためのものだったとしても。

「僕は悪運が強いらしいので」

「もう……またそんなこと言って」

「ですが、」

「ん？」

悪運が強いのは明らかだ。

だが、それだけで済ませるのは皆に 特に、天上院さんに失礼だ。

「ですが、少しだけ自信を持たせてもらいます」

それだけ言って、ボートを漕ぎ出しその場を去る。

3人分の体重を支える船体は重いが、何故か僕の心は軽やかだった。

もつとも、興奮気味に話しかける十代と、何度も礼を言う翔の対応に追われ、そんなことは直ぐに忘れ去ってしまったが。

ただ、負けられない理由が出来たのは確かだ。

仮にも自分は、天上院さんに勝利した。

故に、自分の敗北は彼女の汚点にも成り得る。

強くなろう。今よりも、遥か高みに昇ろう。

3人乗りのボートを漕ぎながら、そう静かに誓った。

四話目：自信（後書き）

主人公のデッキについて、暇だったら以下の中からアナタの感じたことを選んでみて下さい。

いや、他に思ったことがあるなら別にそれを書いてもらって構わないのですが。

- 1、ガチ過ぎて萎える
- 2、まあ丁度良いんじゃない？
- 3、ネタ過ぎだろ……もっとまともな使え
- 4、明日香が可愛くて生きるのがツライ

ご協力よろしく願います。

あと、かなり人が嫌な予感していると思いますが、主人公のデッキには……まあ、つまりそういうことです。

五話目：月一試験

/

双子というのは、宿命的に似てしまうものである。

それは例えば外見であつたり、性格であつたり、癖であつたりと様々だ。

自分と十代もまた世間一般の御他聞に漏れず、よく似ている点というものが存在する。

「うおおおお！ 遅刻だ遅刻だ遅刻だあああ！？」

「十代、叫んで無駄な体力を使うのは止めた方がいい」

2人揃つて、朝に異常に弱い。

昔から全く変わらない性分であり、どうしても改善出来ないものの一つでもある。

こうなることが解っているので、普段は早めに寝ているのだが、テスト前で根を詰め過ぎてしまったようだ。

その結果、テストに間に合わなければ本末転倒である。ああ、本当に自分は詰めが甘い。自惚れや油断は、自信とはまた別のものだ。いや、それ以前にテストに遅れるということ自体が愚劣の極み。学生の本分とは勉強なのだから、尚更である。

通学路である坂道を、十代と共に全速力で駆け上がって行く。今日

に限っては、傾斜のキツいこの坂が恨めしい。

体力的な問題は無いが、それでも無駄に時間を浪費してしまうのだ。

体力作りと精神鍛練の一環であることは明白であり、その必要性は重々承知している。

そもそもこうなった原因も自分にあるので、文句を言う筋合いなど無いのもまた理解している。

だが、せめて。せめて、もう少しだけでも立地条件を考えて頂きたかった……！

と、自分のことを棚に上げ責任転嫁を果たそうとする己の思考を断ち切り、自身を頭の中で百編ほど殺す。

自分の人間性は、入学時から相も変わらず見下げ果てたものであるらしい。

健全な精神は健全な肉体に宿るというが、自分という存在によってその言葉は否定されそうだ。

肉体的には健康的かつ健全であると十分言えるにも関わらず、それに見合った精神は未だ宿る気配がない。

否、そんな考えだから駄目なのだ。宿るの待つなど、完全に受けの姿勢ではないか。

努力を重ね、自ら宿してみせるくらいのことが言えなければ先はない。

と、何だかあまり見ない物を追い抜いた気がして、十代共々急停止振り返って見れば、ふくよかな女性が車を素手で支えていた。どうやら故障しているらしい。

「あー、弱いんだよなあ、俺、こついうの……九条、手伝おうぜ！」

同感である。困っている人を見捨てるのは、人道に反するものだ。遅刻するのは確実だが、それはまあ仕方ない。テストなら来月もあるし、今回は潔く諦めよう。

/

結局、僕と十代は実に30分遅れで教室に到着した。

途中入室が認められていたのは幸いである。あまり時間は無いが、それでも0点は回避出来そうだ。入室して早々、十代と万丈目が言い争いを始めた時はどうしたものかと思ったが、今回の試験監督兼オシリス・レッドの寮長である大徳寺先生の一言でひとまず沈静化。

大徳寺先生から試験用紙を受け取って、席に着くと同時に四方八方からの視線に晒される。

……やはり、途中入室は止めておくべきだったかもしれない。自分のせいで、周りの人達の集中力を途切れさせてしまったようだ。自身の結果が悪いだけなら良い。遅れたのは自業自得で、寝坊したのも自分のミスだ。

しかし、周りに悪影響を与えるのは許されないことだ。この試験に全ての望みを懸けて挑む生徒の足を引っ張るなど、言語道断。本来であれば事情を説明し、他の生徒の試験結果について考慮して貰えるよう全霊を尽くすべきなのだが、生憎と自分にそんな力はない。

非常に心苦しいが、この場合は皆に諦めてもらうより他にないのである。

……………心苦しいなどと、よく言う。

本当に、自分という存在には虫唾が走る。

皆に悪いと思いながらも、この手は試験問題を解き続けているではないか。

我ながら浅ましいことだ。所詮、自分は口先だけ　言葉にすらしていない分、余計に質が悪い。

あの女性に手を貸したのも、きっと計算的な思考からなのだ。いや、それを言うなら寝坊したことも含めて、か。

大方、試験結果が悪かった時の言い訳でも探していたのだろう。

“遅刻したから時間が足りず、最後まで問題を解くことが出来なかった”。

成る程、一見、筋が通っているようには取り繕えるか。反吐が出る。

一瞬だけ十代の方に視線を向けると、いびきをかきながら眠っていた。

要領の良くない自分と違い、十代はやれば出来る類の人間なのだが、本人はこういったことにまるで頓着しない。

間違いなく、先程の人助けも自分のような打算の結果ではないのだから。

違うのだ。双子という間柄でありながら、根本的な部分で自分と十代は全く違う。

十代はそこにいるだけで人を笑顔にし、希望を与える才能がある。事実、自分はそれに幾度となく救われた。

その在り方は正に英雄。人々の希望と羨望と憧憬を一身に集め突き進む超越者。

対する自分は、少しだけ自信のある根暗な決闘者だ。

本当に、十代が自分に似なくて良かったと思う。

十代は明るいのが一番だ。暗いのは自分だけで十分に過ぎる。

溜め息を吐いて、書き掛けの答案に視線を落とす。まだ殆どの解答欄が埋まっていないが、もう解く気にはなれなかった。

先程までの思考も自省も、十代に言わせれば考え過ぎというヤツなのだろうが、仮にそうでも自分にはどうしようもない。

生まれつきの性格を矯正するなど、そう易々と出来るものではないだろう。

再び小さく溜め息を吐き、空欄だらけの解答用紙を裏返す。何とも不真面目な行いで、赤点は確実だが、少しだけ気が楽になった。

もつとも、自分のことだから後になって激しい後悔に襲われ、更に一人猛省することになるだろう。

だが、今はこれでいい。それに、実技で良い結果を出せば、退学だけは免れるだろう。

筆記試験が終わると同時に、午後の実技に向けてデッキを強化しよう。と購買部には生徒が殺到していた。

ただ、本日入荷予定だった新カードは全てたった一人の人物によって買い占められてしまったそうだ。

私的見解ではあるが、カードの買い占めを行ったのは学園側ではないだろうか？

試験直前に新カードを投入するのは、所謂ドーピングのようなものだ。それでは、本当の意味で生徒の実力とは言えないだろう。よって、それを防ぐために学園側がカードを買い占め　いや、正確には差し止めを行ったのではないか？

きつと、カードは試験が終わってから改めて販売されるのだろう。

つまり、翔が手にした最後の１パックは回収し忘れた分ということになる。

フェアではないが、これくらいなら許されてもいいだろう。１パックでそう都合の良いカードが出るとも思えないし。

「それより実技までまだ時間がある。早くデッキを組み立てに行こうぜ！」

数は少なくとも、新カードが見れるということに十代は興奮気味だ。無論、自分とて興味はある。本来ならまだ見ることすら出来ないはずのカードだが、この場は役得ということにして欲しい。

「お待ちよ！」

購買部を出ようとしたところで、不意に呼び止められる。

声のした方に視線を向けると、受付のお姉さんの後ろからふくよか

な妙齡の女性が現れた。

あの人は、今朝の……

「あ、今朝のおばちゃん!？」

「おばちゃん、じゃないわよ。トメって呼んで」

この女性の名前はトメさんというらしい。

服装と受付のお姉さんの反応からして、購買部の責任者で間違いないようだ。

「それより、こっちにいらっしやいよ」

不敵な笑みを浮かべ、手招きするトメさん。

そして、ポケットからカードを取り出し、

「コレ、とつといたよ」

と、自分と十代に一枚ずつ手渡してきた。

「これは車を押してくれた御礼さ。だって、オシリス・レッドのアントラ達じゃ、レアカードの一つも無いと、さ」

「　　!」

十代は喜んでいるが、これは受け取ってはならないものだ。少なくとも、自分にその資格はない。

返そう。失礼な行為だとは重々承知しているが、受け取ることなど出来るはずがない。

「何をそんなに暗い顔してるんだい？ それ、弱っちいカードなのかい？」

「いえ、そんなことは……」

むしろ、自分のデッキにはよく合ったカードだ。
一枚あるだけでもかなり違うだろう。

「だったら良いじゃないか。男ならウジウジしてないで、もっとシヤキツとしな！」

「！……はい。了解しました」

そうだ。少なくとも今は悩む必要など無いのだ。
自分は未だ未熟で、無力な子供に過ぎない。

だから遠慮するなど、もっと大人を頼れと、トメさんは言ってくれているのだろう。

彼女は長年、この購買部で様々な生徒を見てきたはずだ。
そうやって自然と鍛えられた観察眼を持つてすれば、自分のような底の浅い人間の内面ごとき、容易く看破出来るに違いない。

そう、このカードは自分に対する激励なのだ。
御礼という体裁をとったのも、そうしなければ自分が受け取らないと判断したからだろう。

やはり、デュエルアカデミアは底が知れない。
教員のみならず、スタッフ一人を見ても素晴らしい人間性の人物が

集まっている。

トメさんの心遣いを無駄にしないためにも、実技は特に気合いを入れて挑むでしょう。

……それにしても、これ程の人材を束ねまとめる鮫島校長の器量は、一体どれ程のものなのだろうか？

少なくとも、自分が想像もつかない領域にいるであろうことは疑いようがない。

是非一度、機会があればじっくり御教授いただきたいものだ。

/

そしてついに、実技試験の時間がやってきた。

月一試験における実技は、基本的に同じ寮の生徒同士で行われる。普段の授業は合同であるため、試験の時はなるべく近い実力の者と決闘させたいのだろう。

「入学試験であれ程の成績を残したキミ達と、オシリス・レッドの生徒では釣り合いがとれないーノデス。

そこで、オベリスク・ブルーの生徒こそが、キミ達の相手に相応しいと判断致しましたーノデス！

勿論、キミ達が勝てばラー・イエローに昇格するってことになりまーすノですが、如何ですーノ？

この申し出、受ける気になりますですかーノ？」

つまり、自分と十代の対戦相手がオベリスク・ブルーの生徒だとい

うのは、その実力を認められているということに繋がる。

いきなりオベリスク・ブルーの生徒が決闘場に入って来た時は何事かと思っただが、随分と高い評価を受けているらしい。

天上院さんといい、ここの人間は自分を買いかぶり過ぎている気がする。

十代と違い、自分はそんなに上等な人間ではないのだ。双子だから何から何まで似ている、と判断するのは止めていただきたい。

だが、自分は少しだけ自信を持つことに決めたのだ。

この場合は、そんな自分の新たな旅立ちの機会としては丁度良い。

それに、クロノス教諭がわざわざ慣習を曲げてまで作って下さった機会なのだ。断る理由が無い。

「いいぜ！俺、色んなヤツと決闘をやってみたい。どんなヤツからの挑戦でも受けたいんだ！」

「僕も構いません」

力強く応える十代に続いて、はつきりと己の意思を伝える。

十代の相手は、かつて戦ったことのある万丈目。中断してしまったあの時の続きとは、クロノス教諭もニクい演出をする。

「早速余所見とは余裕だな、遊城九条」

自分の相手は、今日初めて会ったオベリスク・ブルーの男子生徒。向こうが此方の名前を知っているのは、やはり十代が有名だからだ

ろうか。その十代の双子というのなら、名前くらいは知られていてもおかしくはない。

いや、相手は今回の特別措置について知っていたようだから、クロノス教諭から前もって教えられていたのか。

しかし、残念ながら自分は彼の名前を知らない。一方的に名を知られているというのは何となく居心地が悪いので、やはりきちんと尋ねておくべきだろう。

「オイ、この俺がわざわざ話し掛けてやっているんだぞ！ 何か返事をしたらどうなんだ？ それとも、もう怖じ気づいたのか？」

「失礼ですが、」

「あん？」

「一体アナタは、どちら様なのでしょうか？」

“わざわざ話し掛けてやっている”と言っているからには、それなりの身分の人間なのだろう。

政治家の息子か？ 名のある旧家の出か？ まさか、皇族に連なるお方か！？

だとすれば、自分の態度は非常によろしくないものだ。皇族関係者に面と向かって“お前など知らん”と言い放つなど、正気の沙汰ではない。

「貴様ツ……！ さっきのアナウンスで言っていたのを聞いていなかったのか！？」

「申し訳ありません。考え事をしていたもので、聞き逃していたようです」

怒りの感情を隠そうともしない相手に、自分はただ正直に答える。こういう場合、偽りの無い真摯な言動が何よりも有効なのだ。

「フン！ ドロップアウトらしい理由だな。まあ、俺は心が広いから、どうしてもと言うのなら、改めて教えてやってもいいぞ？」

「慎んで辞退させていただきます」

「……っ!？」

実に皇族関係者らしい寛大な態度であらせられるが、自分などにそんなお心遣いは不要である。

が、相手はそれが気に入らなかったらしい。

「貴様……俺を馬鹿にしているのか!？」

顔を真っ赤に染め上げ、怒りを露わにする対戦相手。

自分としては遠慮したが故の言葉なのだが、折角の申し出を拒否したのは事実である。謝罪はしておくべきだろう。

「馬鹿にしているつもりはありません。ただ、貴方様がわざわざ改めて名乗られる必要はない、と申し上げただけのこと。

しかしながら、貴方様の申し出を断つたのもまた事実。その件に関しては、深く謝罪いたします」

「やっぱり俺を馬鹿にしているだろ!？ もう許さん……叩き潰し

「やる！」

何故そうなる。

しかし、叩き潰す、か。

「残念ながら、それは叶わないかと」

「何っ！？」

「勝つのは自分ですから」

相手に対し無礼なのは解っている。自分の柄じゃないのも解っている。

だが、誰に対してであろうが、これは譲れるものではない。

少なくとも、彼女よりも劣るであろう相手に、自分が負けることは許されない。

「吠えたな……オシリス・レッドのドロップアウト風情が、この俺に勝つだど！？ ならば、俺が貴様の身の程を教えてやる……！！」

「決闘！」

今回のデッキは、以前までの物とは違う。

強くなること誓ってから試行錯誤を繰り返し、トメさんから譲り受けたカードによって、ついに一応の完成に漕ぎ着けた新たなデッキ。昨日までは何の成果も無く、先程やっと完成したためこれが初の実戦だが、問題ない。

何故か、そう確信が持てる。

「俺の先攻だ、ドロー！」

“ゴブリン突撃部隊”を召喚！ 更にフィールド魔法“ガイアパワー”を発動！ この効果で地属性モンスターの攻撃力は500アップ！ つまり“ゴブリン突撃部隊”の攻撃力は2800！ カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

“ガイアパワー”を発動したということは、地属性メインのハイビートだろうか？

まあ、何が来ようと僕のやることは変わらない。デッキ構成は少しばかり変わったが、基本はいつもと同じである。

「僕のターン、ドロー。」

手札から“ヘカテリス”を墓地に捨てることで、デッキから永続魔法“神の居城 ヴアルハラ”を手札に加えます。

そして、“神の居城 ヴアルハラ”の効果を発動。この効果により、手札から“墮天使ゼラート”を特殊召喚」

攻撃力は互角。相手が本当にハイビートなら、この状況での相討ちは避けるべきだ。

ならば、

「“墮天使ゼラート”の効果を発動。手札の“ダーク・パーシアス”を捨て、相手の場のモンスターを全て破壊する」

「無駄だ！ 永続罠発動、“スキルドレイン”！ 俺はライフを1000支払うことで、場に存在するモンスターの効果は無効化する

！ 相手残LP 4000 3000

……止められたか。いきなり出鼻を挫かれるとは、新デッキにして早々幸先が悪い。

いや、そんなことよりも“スキルドレイン”とは……また随分と厄介なカードを使ってくる。

「どうだ、貴様のエースの効果を封じてやったぞ。しかも、それだけではない。“スキルドレイン”は俺の場にも影響が及ぶ……即ち、“ゴブリン突撃部隊”のデメリット効果も無効化されるのだ！」

“スキルドレイン”はその性質上、デメリットアタッカーや妥協召喚モンスターと相性が良い。

そのため、彼が今現在行っているような運用方法が、“スキルドレイン”を採用する上での基本戦術となる。

オシリス・レッドの自分では、そんなことは知らないと思ったのだろう。

怒り心頭の様子であるにも関わらず、わざわざ説明して下さるとは、流石はオベリスク・ブルー。

少々口調が乱暴ではあるが、その本質は高潔なお方であるようだ。

だが、今はそれに感心している場合ではない。

「手札から魔法カード“トレード・イン”を発動。“墮天使スペルビア”を手札から墓地に送り、2枚ドローします。

……“ネクロ・ガードナー”を守備表示で召喚。更にカードを1枚伏せ、ターンエンド」

“サイクロン”でも引ければと思ったが、そう都合良くはいかない

か。

「俺のターン、ドロー！ 先ず初めに“ゴブリンエリート部隊”を召喚！

そして、2枚目の永続罫“血の代償”を発動。これにより、俺は500ライフ支払うことで手札からモンスター1体を召喚することが出来る！ “電動刃虫”を召喚！」

相手残LP 3000 2500

これは少々マズい。

“ガイアパワー”によって“電動刃虫”の攻撃力は2900まで上昇し、“墮天使ゼラート”を一方向的に破壊することが可能だ。

判断を誤ったか。相討ちでも、せめて“ゴブリン突撃部隊”を処理しておくべきだった。

「バトルだ！ “電動刃虫”で“墮天使ゼラート”を攻撃！」

「……」 自残LP 4000 3900

いや、今は切り換える。まだ決闘は終わっていないのだ。反省ならば後からいくらでも出来る。

「ハッ！ その伏せカードは飾りか？ “ゴブリンエリート部隊”でその雑魚に攻撃！ そして“ゴブリン突撃部隊”で貴様にダイレクトアタックだ！」

“墮天使ゼラート”に続き“ネクロ・ガードナー”も破壊され、自分の場はがら空きとなった。

しかし、“スキルドレイン”の効力は、墓地にまでは影響を及ぼさない。

「墓地に送られた“ネクロ・ガードナー”を除外し、“ゴブリン突撃部隊”の攻撃を無力化します」

故に、墓地で発動する効果を無効化することは出来ない。

「ちいつ、悪あがきを……！
ならば手札から速攻魔法“サイクロン”を発動！ 貴様の場の“神の居城 ヴアルハラ”を破壊！ ターンエンドだ」

流石に抜け目が無い。

相手の場には最上級並みの攻撃力を持つモンスターが3体に、永続罠の“スキルドレイン”と“血の代償”が1枚ずつ。

対する自分の場には、伏せカードが1枚のみ。しかも、今の時点でこのカードは使えない上に、“ネクロ・ガードナー”も使用済み。
“神の居城 ヴアルハラ”も破壊され、手札にモンスターは無い。

「僕のターン、ドロー」

……よし！

「魔法カード“闇の誘惑”を発動。カードを2枚ドローし、手札から“堕天使ディザイア”を除外します」

「まだ抵抗するか。いくらオシリス・レッドでも、この状況が理解出来ないわけがないだろうに。」

恥を晒す前に、さっさとサレンダーしたらどうだ？」

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

サレンダーをするつもりは無い。元より、その必要は無い。

既に勝利への布石は整った。あとは相手のドロー次第。

「最後までム力つくヤツだ……貴様の望み通り、徹底的に潰してやる！」

俺のターン、ドロー！ これで終わりだオシリス・レッド！ 全モンスターで攻撃……！」

此方の伏せを完全に無視した特攻。確かに攻撃反応型の罠は無いが、一切の躊躇無しとは恐れ入る。

この大胆さもまた、彼がオベリスク・ブルーたる由縁の一つか。

しかし、

「伏せカード、速攻魔法“光神化”を発動。手札から“堕天使アスモディウス”を、攻撃力を半分にして特殊召喚する」

“光神化”。天使族の召喚補助を目的とした効果を持つ、自分がトメさんから譲り受けたカード。

このカードの効果によって召喚されたモンスターの攻撃力は半減し、発動したターンの終了と共に破壊されるというデメリットを持つが、有用なカードであることに違いはない。

「無駄だ！ 俺のモンスターは貴様のモンスターを凌駕している！ そんな壁で止められると」

「更に罨カード発動“無力の証明”。自分の場にレベル7以上のモンスターが存在する時、相手の場のレベル5以下のモンスターを全て破壊する」

「な、に……！？」

一瞬で相手モンスターが全滅する。残っているのは、自分の場の“アスモディウス”のみ。

「……っ、クソッ！俺は1枚カードを伏せてターンエンドだ！」

「“光神化”の効果により“堕天使アスモディウス”は破壊され、自分の場に2体のトークンが特殊召喚されます」

“アスモディウス”の効果は破壊された後、つまり場から離れて初めて発動する。

そのため、“スキルドレイン”の影響を受けず、トークンを残すことが出来るのだ。

残された“アスモトークン”と“ディウストークン”の攻撃力は、それぞれ1800と1200。

2体合わせれば、相手のライフを削り切れる。

「僕のターン、ドロー。」

“アスモトークン”と“ディウストークン”で、ダイレクトアタック

「詰めが甘いんだよ、オシリス・レッド！お返した、罨カード発動“聖なるバリア ミラーフォース”！」

！ 先程の伏せカードはこれか。だが、問題ない。

トークンは通常モンスターとして扱われるため、“スキルドレイン”の影響下であってもその効果を失うことはない。

よって

「 “アスモトークン” は、カード効果によっては破壊されない」

“ディウストークン” は破壊されてしまったが、攻撃は続行される。

「ぐっ……（落ち着け、あのトークン1体だけならまだ凌げる。次のドロウでモンスターか、蘇生カードを引ければまだ立て直せるはずだ！）」

「残念ながら、これで終わりです。永続罠、“暴走闘君” 発動。場にこのカードが存在する限り、攻撃表示で存在するトークンの攻撃力は1000上昇し、戦闘では破壊されなくなる」

「なっ！？ そ、それは、最初に伏せていた……！？」

「はい」

トークン専用の強化カード。使いどころは選ぶが、今回のように奇襲性は高い。

保険という意味でも“アスモディウス” と相性が良いと思い投入したが、しっかりと役に立ってくれた。

「そん、な……嘘だ、この俺が、オシリス・レッドなんぞに……！？」

ショックなのは解らなくもない。

怒りに我を忘れておらず、油断さえしていなければ勝者は彼だっただろう。

だが、結果は変わらない。

「僕の勝ちです」

「う、うわあああああ!？」 相手残LP2500 0

“アスモトークン”の攻撃が決まる同時に、周囲から凄まじい歓声があがった。

何事かと思えば、十代と万丈目の決闘も決着を迎えたいらしい。

「ガッチャ! 楽しい決闘だったぜ!」

あの様子からすると、十代が勝ったのか。……良かった。

と、いきなり巨大なモニターの画面が切り替わり、鮫島校長の姿が映し出された。

『見せてもらいましたよ、遊城九条、遊城十代。キミ達のデッキへの信頼、モンスターとの熱い友情、そして何よりも、勝負を捨てない決闘魂を。』

それは、この場にいる全ての者が認めることでしょう。よって勝者、遊城九条君、十代君。キミ達は、ラー・イエローへ昇格です』

「……!」

これは予想外の事態である。十代は兎も角、自分が昇格……？
確かにクロノス教諭がそんなことを言っただけ……ああ、成る程。

「凄いよ！ やっぱアニキと九条君は凄いよ！ 感動しちゃったよ……！」

「遊城十代、そして遊城九条、おめでとう。 ようこそ、ラー・イエローへ」

「ああ！」

盛り上がっている周囲を尻目に、モニターに 正確には、その中の鯨島校長に向き直る。

「少し、よろしいでしょうか？」

『ん？ どうかしましたか？ 遊城九条君』

「はい。実は」

/

結局、自分と十代は昇格することなく、これまでと変わらずオシリ・レッドに留まることとなった。

鯨島校長の提案は非常に有り難いものであったが、自分はまだまだ未熟である。

昇格が認められたということは、成長していると判断されたことは間違いだろうが、僅かひと月足らずで自分の性根が改善されているとは思えない。

筆記試験もほぼ白紙であつたし、退学にならないだけでも十分過ぎるほどのものだ。

よつて、自分自身が納得出来るまで、今回の件は保留とさせていたのだのである。

十代は十代で、オシリス・レッドが気に入っているからと昇格を断つたそうだが、もしかすると、自分が昇格しなかったことで気を使わせてしまったのかもしれない。

そうだとしたら、今からでも昇格するように説得するべきか……と
考え、止めた。

本当に昇格したかつたのならば、十代は誰に言われるまでもなくそうしただろう。しなかったということは、つまり大して興味が無かつたということだ。

そもそも、あれで意外と頑固なところがある弟は、一度決めたことはなかなか曲げないのである。

まったく、本当に困つたものだ。一体、誰に似たんだか……

六話目：廃寮にて

/

もうそろそろ寝ようか。と思ったその時、ノックも無しに自室のドアが開け放たれた。

物凄い既視感のある状況に軽い頭痛を感じながらドアの方を見ると、予想通りの来訪者。

己の片割れにして双子の弟、十代が満面の笑みを浮かべてそこにいた。

「こんな時間にどうした、十代。僕はそろそろ寝たいんだけど……」

はつきり言って、嫌な予感しかない。

しかも、こういう場合に限って自分の勘はよく当たる。

「九条、廃寮に探検しに行こうぜ！」

予感的中。そしてさようなら、僕の睡眠時間。

/

ことの始まりは昨日の夜。

十代達は捲ったカードのレベルだけ恐い話ゲームなる物に興じていたらしい。

その名の通り、モンスターのみに構成されたデッキから各々が順番

にドロし、そのレベルに対応した恐い話を披露する、という遊びだそうだ。

自分のことも誘うつもりだったのだが、既に寝ていたので諦めたらしい。

「久しぶりに九条の恐い話、聞きたかったんだけどなー。幽霊が皿数えるヤツとか、飴買っていくヤツとか」

「十代、アレは落語だから」

ちなみに“お菊の皿”と“子育て幽霊”である。

閑話休題。

そんなこんなで恐い話を続けていたところ、興味を持ったらしい大徳寺先生も急遽参戦。

大徳寺先生が引いたのはレベル12の“F・G・D”。最高レベルということで期待する翔や十代に、先生はとある廃寮の話をしてくれたそうだ。

曰わく、この島の奥に使われていない寮が存在しており、元は特待生寮だったそこで多くの生徒が行方不明になっている。

何でも、闇のゲームに関する研究を行っていたと噂されているらしいが、真実は先生も知らないという。

正直、有りがちな話ではある。今は使われていない建物で行方不明者が云々というのは、怪談の基本だ。

似たような噂話なら、探せばいくらかでも見つけられるだろう。

しかし、十代はこの話に興味を引かれたらしく、肝試しがてら探検してみようと考え、今夜出掛けようというのだ。

明日は授業も休んで丁度良いと考えたのだろうが、夜間外出はあまり誉められた行動ではない。

それに廃寮と言うからには、まともな手入れがされていることは期待出来ないだろう。どんな危険があるか解ったものではなく、そもそも立ち入り禁止になっているはずだ。

何とか思い止まるよう十代を説得するが、「絶対行く」の一点張りで聞く耳を持たない。

「九条は探検したくないのか？　浪漫だぜ、浪漫！」

「いや、しかし規則は守らないと……」

自分とて男だ。探検という単語に心が躍らないわけではないが、それとこれとは別である。

「いいから行こうぜ！　ちょっと見て、直ぐ戻るからさ。この通り！」

顔の前で手を合わせ、拝むようなポーズ。……何故そこまで拘る。

まあ、自分が見ていない所で怪我でもされては適わない。ならば、むしろ自分が監視していたほうが安全だろう。

弟が危険な目に遭うよりは、規則を破る方がまだマシだ。

そう自分に言い聞かせ、十代と共に部屋を出たのが三十分程前のこ

と。

現在、自分を含む四人は廃寮への道を進んでいる。深夜の森は暗い闇に包まれ、自分達以外に人の姿など全く無い。

「しかし隼人が行きたがるなんて意外だぜ。いつもは授業に出るのも面倒臭がるくせによ」

「別に俺、出不精でも勉強嫌いなわけでもないよ。ただ、嫌なんだ……決闘で勝つことだけの授業が」

「勝つ方法以外に決闘で勉強することなんてあるの？」

「あるよ、きつと。例えば、闇のゲームとか」

「闇のゲームねえー」

そんな内容の会話をしつつ、廃寮へ向かう。

本当にこつちで合っているのだろうか？ と不安になってきた頃、古びた建物が見えてきた。おそらく、あれが廃寮だろう。

廃寮に近付いてみれば、入り口に一輪の花が供えられていた。供養のため、だろうか？

「アニキ、やっぱり止めましょうよ……」

「何言ってるんだよ。ここまで来て止められるかよー!」

「墓以外で供養のための品を供えると、霊魂が成仏出来ずに地縛霊になると聞いたような……」

「九条君も恐いこと言わないで!？」

次の瞬間、近くで小さな物音。

音のした方を見てみると、そこには

「天上院さん？」

意外……でもないか。自分は彼女と何度か遭遇しているが、初回以外は全て夜間である。

今回は夜の散歩だろうか？ と一瞬考えたが、彼女の雰囲気からするとどうも違うらしい。

「明日香!？　なんで明日香がここに？」

「それはこっちの台詞よ。あなた達こそ何してるの!？」

そう問い掛けてくる天上院さんの表情は険しい。

「ちよいと俺達は探検にね」

「あなた達、知らないの？　ここで何人もの生徒が行方不明になっている、って」

「そんな迷信、信じないね」

「この寮の話は本当よ。遊び半分で来る場所じゃない！　それに、ここは立ち入り禁止のはず。学校に知られたら騒ぎになるわ」

天上院さんの様子からすると、この寮の噂は全くのデタラメという

わけでもなさそうだ。

中等部からアカデミアに通っているらしい彼女ならば、最近赴任して来たという大徳寺先生よりも詳しいのかもしれない。

「そんなの恐くて、探検なんて出来ないぜ」

「真剣に聞きなさい！ 九条からも何とか言っただけで！」

いきなりの無茶振りであった。いや、一応は兄だから説得出来る実践んだのか。

しかし、残念ながら自分に十代を止めるだけの技量は無い。というか、

「止めるのに失敗したから此処にいるのですが……」

「何だよ、やけに絡むなあ……そっちこそ質問に答えてないぜ？ どうしてこんな所にいるんだよ？」

「勝手にすればいいわ……」

完全に怒っているらしく、天上院さんは後ろを向き歩き出してしまった。

自分達のことを心配して？ いや、それだけではない。彼女が優しい性格なのは解っているが、今回は何かが違う。

鬼気迫るといつか、感情的になっているといつか……

「……ここで消えた生徒の中には、私の兄もいるの」

「！」

天上院さんが去り際に呟いた一言に、思わず言葉を失う。

お兄さんが行方不明に……だから、あれほど必死になって自分達を止めたのか。門の前の花も、天上院さんが置いた物なのだろう。

彼女自身が一番ツライはずなのに、他人である自分達を本気で心配してくれるとは、やはり素晴らしい心根の持ち主だ。

「アニキ……今、明日香さんが言ったこと、僕、ここの噂は作り話だ、って……」

「まあ、入ってみりゃ解るさ。行くぞ」

ただの噂話ではないというのが解っても、十代に迷いは無い。それどころか、より一層やる気を出してさえいる。

天上院さんのお心遣いを考えれば是が非でも止めるべきなのだが、それは難しそうだ。

何より、天上院さんが苦しんでいるのを見て見ぬふりなど出来ない。

自分は大したことが出来るわけではないし、彼女に手伝ってくれと頼まれたわけでもない。

それでも、無力な自分に出来るだけのことは、例え自己満足であってもやっておきたい。

そう、自己満足だ。

知り合いの心の痛みを少しでも和らげたい。と言えば聞こえは良い

が、自分はただ、何もしなかったことで後悔したくないだけなのだ。それに、彼女には大きな借りがある。それは簡単に返せるほど軽い物ではなく、だからこそ自分は彼女のために尽くさなければならぬ。

これは一つ目の恩返し。この廃寮に、彼女のお兄さんの手掛かりがあるのなら、自分はそれを見つけよう。

簡単な話ではないだろうが、それ故に見返りとして相応しい。十代や隼人と共に、そろそろと廃寮の敷地内へと入って行く。

「そこで待つてるか？」

十代が未だに門の前で躊躇する翔にそう尋ねると、一人で置いて行かれるのは嫌だったらしい。翔は慌てて此方に走って来た。

改めて四人揃ったところで、廃寮の中を進んで行く。

案の定、殆ど手入れはなされていないが、思ったより状態は悪くない。

「埃は被ってるけど、オシリス・レッドの寮とは大違いだな。いっそ、俺達ここに引っ越さないか？」

「確かに建て付けは良さそうだ」

「止めてよアニキ！ 九条君も！ 僕は絶対嫌だからね！」

「お、俺も……」

翔と隼人には不評のようだ。きちんと掃除さえすれば、十分使える

ようになると思っただが。

足下に気を付けながら進んでいると、壁に様々な象形文字が象られた部屋にたどり着いた。

「ほ、本当にここで闇のゲームを？」

「そ、そんなの迷信だってば！」

「ふーん、千年アイテムってのは7つあったんだ」

十代達は壁の象形文字に興味津々といった様子だ。かく言う自分は、机や棚を調べて　と、棚の上に写真立てが飾られている。

写真には“FUBUKI 10 JOIN”というサイン。

……顔立ちなどが何となく天上院さんに似ている気がするが、もしかこれがお兄さんだろうか？

一応、この写真は回収しておこう。写真立てを上着のポケットに入れ、他に何かないかと探索を再開。

その時であった。夜を静寂を引き裂くように、女性の悲鳴が響き渡る。

今の声は、天上院さん……！？

「行こう！」

十代の言葉に頷き、奥へ向かうと、床に1枚のカードが落ちていた。
“エトワール・サイバー”……天上院さんのカードである。

更に、何かを引きずったような跡が奥に続いていた。……目印にしては露骨過ぎるが、他に手掛かりもない。

跡を辿り奥へと急ぐ。狭い通路を進んで行くと、その先には妙に開けた空間があつた。

そこにあつたのは棺が一つと、その中に捕らえられた天上院さんの姿。

見たところ目立った外傷は無く、どうやら眠っているだけらしい。そのことに少しだけ安堵していると、突如として、周囲に声が響いた。

「フフフ……この者の魂は、もはや深き闇に沈んでいる」

「誰だ!？」

十代が叫ぶと同時に、煙の中から大きな人影が現れた。

大柄な体躯に全身黒ずくめの服装。そして目を隠す仮面。

……物凄く分かり易い不審者であつた。ここまで露骨だと、もういつそ清々しい。

「ようこそ、遊城十代……我が名はタイタン。闇の決闘者」

「貴様、何者だ! 明日香に何をしたんだ!？」

しかも驚くべきことに、あの不審者は十代を知っているらしい。確かに十代は有名だが、それはあくまでも地元やデュエルアカデミア内での話のはず。

どこの誰とも解らぬ不審者に知られているなど、些か以上に考え難い。

いや、待て。不審者？ 本当にそう、か……？

此処、デュエルアカデミアは絶海の孤島に建造されており、外部から島に入るには数多くの検問と面倒な手続きを行う必要がある。

つまり、正規ルートを通ったのならば、彼の身元は保証されているということだ。

無論、正規以外のルートが無いわけでは無いが、海路も空路も厳重な警備体制が敷かれているため、突破出来る可能性は極めて低い。

彼が正規ルートでこの島にやって来たのは疑いようがなく、そして正規ルートを通ることが出来る人間もまた限られている。

即ち、この島の関係者か、或いは招かれた人間のどちらかだ。

そして、おそらくあの男は外部の人間。服装から考えると

「……………手品師の方が」

「え、手品師？」

「ち、違う！ 私は闇のゲームを操る闇の決闘者だ！」

なるほど、そういう芸風の方が。

ならばあの格好にも納得出来る。手品の道具を仕込むのと、闇の決闘者らしさを演出するのに丁度良いだろう。

「ふざけんな！ 闇のゲームなんて、あるわけないだろ！？」

「フッフ、試してみれば解るだろうよ小僧。ここは何人たりとも踏み入ってはならぬ禁断の領域……我はその誓いを破る者に、制裁を下す」

「ここではないなくなった人達も、貴様のせいだな！？ 明日香は返してもらっぜ！」

「私に闇のゲームで勝てるならなあ……遊城十代」

「望むところだ！」

「後悔するなよ？ 小僧！」

何だかノリノリの手品師であつた。ヒートアップする十代の調子に上手く合わせ、外道な闇の決闘者を完璧に演じている。

彼は文化祭が何かで手品を披露するため、わざわざアカデミアまで営業に来たのだらう。

タイタンなどという手品師は聞いたことがないので、おそらくまだ売り出し中の新人だ。

きつと、今回のチャンスを物にするため、人目のつかないこの廃寮で手品の特訓でもしていて、偶然にも天上院さんに遭遇。

舞台上ならともかく、深夜にこんな場所にいたのでは、パツと見では不審者にしか見えない彼の姿に、彼女は思わず悲鳴を上げた。

いきなりのことに焦つた彼は咄嗟に催眠術か何かを使つてしまい、結果、天上院さんを眠らせてしまったのだらう。“エトワール・サ

イバー”はこの時に落としたと推測される。

どうしたものかと途方に暮れている時に、自分達が近づいて来たのを察し、とりあえず天上院さんを手品の道具である棺に入れて運搬適当な場所に棺を置いて姿を隠すはずが、思いの外早く追い付かれてしまったため、ヤケクソ気味に登場した　と、細部は異なるだろうが、大体このような事情だろう。

十代の名前を知っていた理由は、生徒に手品の助手を体験させる予定があり、その候補として選ばれていた。と考えるのが自然か。

……事情を理解すると、なかなか不憫な方だ。不審者などと勘違いしてしまい、本当に申し訳ない。

「「決闘！」」

そんなことを考えている間に、決闘が始まった。デュエルアカデミアに売り込みに来るだけあり、決闘しながら手品を行うスタイルらしい。

やけにリアルなフィールド魔法が発動し、天上院さんの入った棺が、どこかに引きずり込まれるように消えてしまった。

「明日香！？」

「汚いぞ！」

「卑怯者！」

リアルだ。

「何とでも言え。これが闇のゲームだ。何ならお前達も、消してやるつか！」

「「ひいつ!?!」」

タイタンさんの言葉に怯える翔と隼人。

熱の入った演技は正に職人芸。事情を知らなければ、本当に闇の決闘者だと思い込んでいたことだろう。

「お、俺が勝てばいいんだ……」

決闘はタイタンさん優位に進んでいく。

そして十代のライフが減り、タイタンさんの持つ金色がパズルが輝いた。

「消えていく、お前の身体が、ライフポイントに従い、徐々に消える……」

タイタンさんの言葉に従い、十代の身体の一部が消えていった。パズルから出る光で視覚を混乱させ、更にそこに重ねて暗示を掛けているらしい。

「俺の身体が……!?!」

「小僧、言っただろう。既に闇のゲームは始まっている、とな」

「本当に闇のゲームか!?!」

「立ち込めてきた、黒い霧が……重く黒い霧が、貴様達を包む……苦しいだろう? これが闇のゲームのプレッシャーだ。貴様達の足

はもう動かず、誰もこのゲームから逃げることは出来ない」

おお、本当に少し息が苦しくなり、足も重くなってきた。

少なくとも、こと暗示に関しては一流の実力を持つ手品師のようだ。

「フフフ……もがけ、苦しめ。だが、その苦しみさえ懐かしいと思う時が来る。闇のゲームの敗者に待ち受けるものは、永遠の闇だからなあ」

実に雰囲気のある台詞である。やはりプロは違う。

事前の仕込みや打ち合わせ無し、完全なアドリブでこれなのだ。是非とも本番の公演も見てみたい。

「いいや！ 俺は信じない！ 聞いたことがあるぜ。闇のゲームをするには、千年アイテムが必要だってな！ お前はそれを」

十代の言葉に対し、さっき光っていた金色のパズルを見せるタイタンさん。

「 見ろ。これこそが伝説のアイテム、千年パズル。これが闇のゲームだという証」

流石に小道具もよく作り込まれている。少なくとも、未だに事情を飲み込めずにいる十代達が驚愕する程度には、真に迫った出来だ。

威圧するように光輝くパズルを前に 十代は笑みを浮かべる。

十代にとって、この決闘は闇のゲームと同義に感じているはず。それでも尚、十代は愉しそうに笑った。

「こんなゾクゾクする決闘は初めてだ！ 燃えてきたぜ！」

しかし、十代の劣勢は続く。

タイタンさんは決闘で手加減する気は無いらしく、全力で十代を倒しにかかっている。

おそらく、十代に勝ったら催眠術を使ってこの場にいる全員を眠らせ、今度こそ姿を隠すつもりなのだろう。

翔と隼人の声援も虚しく、十代のライフは更に減っていき、身体が消滅が進んでいった。

「ああつ、アニキの右腕が!？」

「え、右脚だろう?。」

翔と隼人で見え方が違うようだ。ちなみに、自分には頭が消えたように見えているので、軽くホラーである。

その後、何とか十代がタイタンさんにダメージを与え、今度はタイタンさんの身体が消えていった。

「消えたの、右手ですよね……?。」

「左、だろう?。」

自分には腹部が消えて見えるため、胴体が泣き別れになっている。それにしても、消える位置が本当にバラバラだ。今回は突発的だったので仕方ないが、本番では完全なものを見せて欲しい。

「さっきから見えてるの違くないツスカ?。」

「どういうことだ？」

翔と隼人が疑問を抱き始めたが、手品師の前でタネをバラすのはマナー違反なので黙っておくでしょう。

決闘が進み、またしてもパズルが光る。粘る十代に業を煮やしたらしく、一気に勝負を決めるつもりのようなのだ。

しかし、こう何度も見せてしまっていていいのだろうか？

「どうだ、もうお前は全身の力が抜け、立つことも出来ない」

タイタンさんの暗示を受け、十代は息を荒くし、ついには気を失って倒れてしまった。

……流石にこれはやり過ぎだ。ある程度の安全性は保障されているのだろうが、万が一が無いとも言いきれない。

今の行動に対し抗議しようとしたところで、急に十代が目を覚まし立ち上がった。

……一瞬、十代のデッキが光ったように見えたが、眼の錯覚だろうか？

「隼人、ヤツの左腕は消えているよな？」

「いや、逆だと思うけど……」

「え？」

「九条はどうだ？」

「胴体が泣き別れになっている」

「ええっ！？」

「なるほど、そういうことか！」

十代もこれが手品だと気付いたらしい。もっと早く気付いて良いのではとも思ったが、それだけ十代が純粹なのだと考え直す。

闇の決闘者に闇のゲーム、実に夢のある話ではないか。

少なくとも、最初からそういったオカルト要素を思考から排除して小利口を気取っていた自分よりは、ずっと好ましい反応だろう。

「クソッ！　これを見る！」

急に目覚めたことに焦ったのか、タイタンさんはまたパズルから光を放つが、そこに十代の投げたカードが突き刺さる。

催眠術の起点であるパズルが破壊され、同時に十代とタイタンさんの身体が元に戻った。

「思った通りだ。コイツの闇のゲームはインチキだ！」

インチキというか手品で、こういう芸風なだけだと思うが。

「多分コイツはマジシャンか何かで、俺達はコイツの催眠術に引っかかっていたのさ！」

身体が消えて見えたのも、本当じゃない。だから俺達にはチグハグに見えたのさ。多分、そのコートやルーレットには、仕掛けがしてあるんだろうぜ！」

下準備無しで急遽用意したのだから、チグハグなのは許してあげて欲しいところだ。

それより、手品師の目の前でタネをバラすのはマナー違反なのだが……いや、十代は彼のことをただの不審者としか認識していないから仕方ないか。

ここまで来たら真実を話した方がスムーズにいくと思うのだが、タイタンさんにも意地があるらしく、まだ自分は闇の決闘者だと言い張っていた。見上げたプロ根性である。

「なら、当然知ってるよな？ アンタの持つ千年アイテム、それがいくつあるのか！」

十代の問いに対し、一瞬答えに詰まったものの、タイタンさんは見事に正解を言い当てた。

しかし、その後まさかの凡ミス。千年パズルが複数あると勘違いしていたらしく、自滅。

小道具を作る際の調査が少々足りなかったようだ。

「墓穴を掘ったな？ お前は自分がインチキ野郎だって自白したぜ！」

「ぬう……私の仕掛けが効かない以上、貴様と決闘を続けるなど無意味なこと」

次の瞬間、大量の白煙が周囲を満たし視界が白く染め上げられた。煙幕に紛れ逃亡を計ったようだ。

逃げるタイタンさんを追って、十代が走り出す。

彼を見逃すのが正しい行動だと思われるが、完全には事情を理解していない十代にそれを望むことは出来ない。ここは自分が十代を引き止めるべきだろう。

十代を追いかけて奥へ向かうと、いきなり床に眼のような模様が浮かび上がる。

千年アイテムとやらの紋章と似ているが、と考えかけた瞬間、床から黒い煙が激しく渦巻き、そのまま十代とタイタンさんは揃って黒い球体に閉じ込められてしまった。

……………いや、何だコレは。

突然の出来事に停止しそうになる脳を半ば無理やり覚醒させ、改めて黒い球体に目を向ける。とりあえず、中の状況が解らないことは手の打ちようが無い。

というか、よくよく考えてみれば、おそらくこれもまたタイタンさんの手品の一つなのだろう。ならば特に害はあるまい。

ひとまずはそう判断し周囲を見回してみれば、隅の方に天上院さんの横たわる棺が置かれていた。

無事であることは解ってはいたが、それでも安堵の気持ちは大きい。

起こすべきかと思ったが、天上院さんの眠りは深いらしく、簡単に目覚めてはくれなさそうだ。

それに彼女は精神的に疲弊しているだろうし、今の時間帯は深夜である。

本来なら寝ているはずの時間で、何より安眠を妨害されるのは激しい苦痛だ。

このまま寝かせておくのが、彼女にとってが一番だろう。

棺の中では寝返りもうてず窮屈だと思われたが、床に寝かせるのは論外であるため、やむなくそのままにすることにした。

自分が抱きかかえれば、という考えが頭をよぎったが、許可無く女性の身体に触れるなど許されることではない。

一瞬でもそんなことを考えた自分を恥じ、自省と煩惱を被う意味合いを込めて壁に頭を叩き付ける。

無論、痛い。だが、自分は痛みが無ければ何も解らぬ屑なのだ。本気でこの性根を正すなら、多少の荒行も必要である。

「九条君！ アニキは ってどうしたのその頭！？」

「大丈夫です、全く問題ありません」

「見た目は全然大丈夫じゃないんだな！？」

少し遅れてやってきた翔や隼人が、自分の姿を見て急に騒ぎ出した。少しばかり頭から血を流している程度で、うろたえ過ぎである。

2人から半ば無理やりに応急処置を受けていると、球体が割れて中から十代が飛び出してきた。

更に球体は一気に萎んで、最後には小さな炸裂音と共に消え去ってしまった。

原理は不明だが、これもまたタイタンさんの手品なのだろう。最後にこんな隠し玉を残しているとは流石である。

「おおー、今度はタネがまるで解らねえ！」

十代も興奮した様子で拍手を送っている。

結局、タイタンさんは決闘に負け、慌てて帰って行ったらしい。

何とも気の毒な話だ。彼も、まさかこんな目に遭うとは思ってもみなかっただろうに。

/

「ん……」

「！　気が付きましたか？」

廃寮から出てしばらくすると、眠っていた天上院さんが目を覚ました。

「九条……？　えっと、どういうことなのか、説明して貰えるかしら？」

「はい。貴女を襲った人物は逃亡しました。その点に関しては安心して下さい。

そして、申し訳ありません。ご忠告を無視したうえに、貴女を巻き込んでしまった」

タイタンさんについては、折を見て事情を話すでしょう。

天上院さんからすれば、彼は自分を襲った不審者だ。今は何を言っ

たところで誤解が解けるとは思えない。彼女は聡明で強い精神を有してはいるが、それでも“女の子”なのだ。

「！じゃあ、あなたが？」

「いえ、あの男を追い払ったのは十代です。自分は何もしていません。……それと、これを」

上着のポケットから“エトワール・サイバー”と写真を取り出し、天上院さんに手渡す。

「兄さん！」

写真に写っていたのは、やはりお兄さんだったらしい。良かった……もし違っていたら、何とも微妙な空気が形成されていたことだろう。

「間違い無い。これは兄さんのサイン……兄さんはいつも、洒落で天上院の天を数字で書いてた……」

なかなか愉快な人物だったようだ。

「すみません、手掛かりはこれだけしか……」

「それじゃあなた、わざわざそのために？」

「……………偶然です。廃寮を歩き回っていたら、偶々目に入った。ただそれだけの話です」

これは自分が勝手にやったこと。

彼女が望んだわけではなく、単なる自分のお節介と自己満足の結果によるものに過ぎない。

そもそも、今回の自分の行動は天上院さんへ恩を返すためのものであり、そういう意味では彼女は労働に対する代価の一部を漸く手にしたとも言える。

故に、自分が彼女のために云々といった類の妄言は不要。そんなものは溝にでも捨ててしまえばいい。

大切なのは、“天上院さんがお兄さんの写真を手にした”という結果のみ。

そこに自分という異物が混入することは許されない。

「もう、嘘が下手ね……」

苦笑するような呟きは、朝を告げる鶏の鳴き声にかき消された。騒ぎにならぬよう、皆が起きる前に急いで寮に戻らなくては。

「それでは天上院さん、また機会があればお会いしましょう」

挨拶もそこそこに、既に走り出している十代達を追い駆ける。徹夜明けの全力疾走はなかなかキツイが、そんなことも言っていられない。

寮に着いたら夕方まで寝てやろう　この時、そう心に誓っていた自分は、何と愚かだったのか。甘い考えにも限度というものがあるだろう。

犯した罪には必ず裁きが下るのだ。

数時間後、僕はこの意味を改めて実感することとなる。

具体的には、査問委員会という場所で。

七話目：練習試合

/

目覚ましの合図が爆発音というのは、なかなか斬新ではあった。凄まじい音量と衝撃が密閉された空間内で反響し、更に硝煙の香りのおまけまで付いてくる。

徹夜明けで普段以上に眠りの深かった自分を一瞬で覚醒させたその威力は、他の追隨を許さぬ正に至高の域にあるとさえ言えるだろう。扉が破壊されてしまうという致命的な欠点さえ無ければ、明日からの目覚ましはこれに決定していたというのに……

我ながら何とも頭の悪いことを考えていると、軍人調の服装に身を包んだ方々がぞろぞろと部屋に押し入って来た。なにこれこわい。

知らないうちにテロリストか何かの怨みでも買っていたのだろうか？ 自身のこれまでの行いを2秒で振り返ってみるが、心当たりなどあるはずもない。

いや、自分が気付いていないだけで、何かやらかしていた可能性がある。でなければ、こんなに殺気だった様子で乗り込んで来たりはしないだろう。

抵抗するのはかえって危険だと判断し、両手を頭の後ろで組み非武装をアピール。

自分の殺害が目的ならば完全に無駄な足掻きでしかないが、心情的に何もしないよりはマシだ。

そんな自分の考えを知ってか知らずか、テロリスト（仮）達は装甲車と思わしきものに乗るよう促してくる。

流石に寮内で始末するのはマズいと考えたのか、それとも最初から拉致が目的だったのか。いずれにせよ、歓迎出来る状況でないのは確実である。

しかし、生殺与奪を握られている以上、自分は大人しく従うしかない。

一般人が武装勢力を単身かつ素手で壊滅させるなど、現実では不可能だ。自殺行為というレベルを軽く超越しているため、絶対にやってはいけない。

装甲車に乗り込むと、中には何と十代と翔がいた。2人も自分と同じく、テロリスト（仮）に捕まってしまったらしい。

自分だけならまだ諦めもつくが、そこに2人が入るというなら話は別だ。何とか逃がす方法を考えなければ。

交渉……は、無駄か。ならば自分が全身全霊の力で暴れ、テロリスト（仮）の注意引き、その隙に2人を逃がすくらいしか方法は無い。

幸いにも拘束されているわけではないため、不意さえ突ければ注意を引くことは可能だ。しかし、まともな拘束も施さないとは、何とも迂闊なテロリスト（仮）である。

無論、それでも自分に油断は許されない。おそらく相手は武装している上に、体格も自分の方が劣っている。そして何より、数が違う。

成功率は希望的観測を交えた上で最大限に大きく見積もっても1割を切り、自身の生存確率はそれより更に低く限り無くゼロに近い。

だが、それでも。たとえ不可能でも、その条理を覆さなければなら

ない時がある。それが、今だ。

問題はタイミング。一瞬でも機を誤れば、この目論見はあっさりと瓦解する。

生か、死か。己の死は必定であるが故に、拾える生が 2人を救う奇跡もまた存在するのだと自身に言い聞かせ、唯一無二の好機を待つ。

少しして、装甲車が停まる。

人員が外に待機している可能性が高いため、ドアが開いた瞬間を狙うのは愚策。ドアがテロリスト（仮）の身体で塞がれ、十代と翔を逃がすことが出来なくなるおそれがある。

テロリスト（仮）の人数と配置を確認し、冷静かつ正確な判断を下さねばならない。

よって、狙い目は降りた直後。同乗しているテロリスト（仮）を無力化した後、十代と翔から引き離すように移動する。穴は多く、策と呼べるようなものではないが、これ以外に方法はない。失敗は即ち、2人の死に直結する。出来るか出来ないかではなく、やらねばならぬのだ。

ドアが開く。さり気なく重心を落とし、軸足に力を込めつつ、促されるまま装甲車を降りる。

そして、テロリスト（仮）の配置を瞬時に確認し

「 校舎？」

/

結論から言ってしまうば、自分達を連れ出したのはアカデミア倫理委員会とやらであった。

学園の風紀と治安維持に努める方々であり、テロリスト云々というのは濡れ衣もいいところである。

冷静に考えてみれば当然だ。デュエルアカデミアのセキュリティは万全であり、テロリストが侵入する確率は殆ど皆無と言っていい。

だというのに、自室の扉を爆破されたくらいでテロリストだと決め付け、更に不意を突く計画まで立てるなど、自分の愚かさ加減には呆れるしかない。

またしても猛省すべき事柄が増え、自身の成長の無さに内心頭を抱えつつ、テロリスト（仮）改めアカデミア倫理委員会の方々の後ろをついて行く。

そうして連れて来られたのは、査問委員会なる場であった。どうやら昨夜の廃寮での規則破りがバレたらしい。

深夜徘徊に立ち入り禁止区域への侵入と、本来ならば即刻退学を言い渡されて当然のことをしたのだが、何とクロノス教諭の寛大なお心遣いにより、条件付きで許されることとなった。

十代と翔が制裁タッグデュエルとやらを行い、それに勝利すればお咎め無し。負ければ即退学という、罪状から考えると破格の条件である。

当初は罰を甘んじて受けようと思っていたのだが、クロノス教諭の折角のお心遣いを見放すわけにはいかない。

それに、厚かましい願いではあるが、自分はまだ此処で学びたいのだ。クロノス教諭のこの提案は、正に渡りに船であった。

指名された2人の反応は対照的で、十代は初めてのタッグデュエルに瞳を輝かせ、翔は呆然としている。

何故、翔を？ と疑問に思わないではないが、クロノス教諭のことだ。おそらく何か深い理由があるのだろう。

何にせよ、自分の命運は2人に託された。

どんな結末になろうと誓って怨みはしないが、願わくばその手に勝利を掴んで欲しい。

自分も出来る限りの助力を いや、今は別にやるべきことがある。

爆破された自室の扉を修理しなければ。あと掃除。

寝直す暇も無いが、全て自業自得なので文句を言うのは筋違いだ。

どこまで自力でやれるか解らないが、大工道具を借りて来よう。

そんなことを考えながら帰路につき、大徳寺先生に大工道具一式と扉の材料を借りたのが30分ほど前のこと。

「私のターン、ドロー！」

“エトワール・サイバー”を攻撃表示で召喚！ カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

“E・HERO クレイマン”を守備表示で召喚！ カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「……………」

「どうしたの、九条。あなたのターンよ？」

「……質問しても、よろしいでしょうか？」

「？ 何かしら？」

「これは何事ですか？」

人生において、理解出来ることの方が少ないというのは、疑いようのない事実であるらしい。少なくとも、自分の愚劣にして矮小な頭脳では、この状況を理解するのは著しく困難であった。

自分は確か、爆破された自室の扉の修理をしていたはずなのだが……

「何事も何も、タッグデュエルの練習よ。私とあなたも制裁タッグデュエルをすることになったの。聞いてなかった？」

「初耳です」

それは十代と翔の役割のはずである。翔には代わってくれと頼まれたが、学園側の決定事項には逆らえない。

……というか、天上院さんは今回の件で罪に問われていないはずだ。それが何故そんなことになっているというのか。

詳しい話を聞いてみれば、彼女も制裁タッグデュエルに参加出来るよう、わざわざ鮫島校長に直訴したのだという。

彼女の普段の生活態度や人間性を考慮すれば不問で当然だと思うが、特別扱いは嫌らしい。意外と融通の効かない方だ。

「あなたにだけは言われたくないわね、それ……」

よく解らないが呆れられているようだ。

もつとも、自分という存在は欠陥で形成されていると言っても過言ではないため、彼女の反応は不自然ではない。むしろ呆れる程度で済んでいることが驚きである。

何はともあれ、天上院さんとタッグを組む以上、足を引っ張るようなことは無いようにしなければならない。

考えてみればリハーサルとしては丁度いい機会であるし、万全を期すなら断るなど論外である。

自分だけならまだしも、天上院さんの命運も掛かっているのだ。練習不足で敗北し、2人揃って退学など笑えない。

扉も後で直せばいいか。と自分を納得させ、十代と翔に向き直る。

十代とは何度も決闘しているが、タッグデュエルは初めてだ。

タッグデュエルでは、通常とは異なる戦略が求められる。ここは慎重にいくべきか。

「では、いきます。僕のターン、ドロー。」

手札から永続魔法“神の居城 ヴアルハラ”を発動。この効果で手札から“ダーク・パーシアス”を攻撃表示で特殊召喚し、ターンエンド」

手札にはより強力なモンスターもあるが、下手に展開して除去されるのは避けたい。今はこれで様子見という。

「僕のターン、ドロー！」

“ドリルロイド”を攻撃表示で召喚！ カードを1枚伏せて、ターンエンド！”

翔のデッキは機械族。はつきり言って、十代のデッキとのシナジーは薄い。

タッグデュエルの場合、基本的にデッキ構成が似通っている方が有利であり、そういった意味では少ばかり心配な組み合わせだ。

せめて双方共にデッキパワーに優れているか、互いの短所を補うことが出来るなら問題ないのだが……まあ、今回の決闘はその確認の意味もあるのだろう。

そもそも、サポート向きでないのは自分のデッキも同じだ。それどころか、場は個別で扱うというルールでなければ、モンスターの召喚すら口クに出来なかったかもしれない。

……… タッグデュエル用にデッキ構成を変えるべきだろうか？

「私のターン、ドロー！」

手札から速攻魔法“サイクロン”を発動！ 翔君の場の伏せカードを破壊！」

破壊されたのは……“和睦の使者”！？

「翔、なんで破壊される前に発動しなかったんだ？」

「え？ あっ！」

十代に指摘され、翔はようやくそのことに気づいたらしい。

初めてのタッグデュエルで緊張しているだろうし、多少のプレイングミスは仕方ないだろう。本番で気を付ければいいだけの話だ。

そう、あくまでもこれは練習。だから仮に結果が悪くとも、それを気にする必要はない。

……いや、その考えは甘えか。

少なくとも、自分に関しては例え練習だろうと完璧な内容でなくてはならない。

にもかかわらず、翔をダシに使い自分が失敗した時の言い訳を前もって用意しようとは、我ながらつくづく見下げ果てた性根である。

自覚も自認もしているというのに、全く改善出来ていない。やはり一度　否。千度ほど地獄へ堕ちるべきか。

それだけ煉獄で焼かれ続ければ、この穢れきつた魂も浄化されよう。というか、浄化されてほしい。

贅沢を言える立場でないのは解っているが、自分にも限界というものがある。どうかこのあたりで勘弁してもらいたい。

ふと、意識を現世に帰還させると、丁度自分のターンが回ってきたところであつた。

間が悪いことに定評のある自分にとって、今回のようなことは珍しい。

多少動きがあつたらしい場を見回す。

十代の場には“E・HERO　サンダー・ジャイアント”と、伏せカードが1枚。

天上院さんの場にはモンスターも伏せカードも無し。

そして自分と翔の場、双方のライフポイントに変化はない。

手札の残り枚数から推測するに、おそらく天上院さんは“サイバー・ブレイダー”を融合召喚し攻撃したが、それを十代が“ヒーロー・バリア”が何かで防ぐ。

更に十代のターンで“サンダー・ジャイアント”を融合召喚。効果で天上院さんの“サイバー・ブレイダー”を破壊し攻撃を仕掛けるが、天上院さんは罠でそれに対処……と、こんなところだろう。

現状は此方がやや不利か。場を個別で扱うというルールは、自分の“神の居城 ヴァルハラ”などにとっては都合が良い反面、今のような状況では些か厄介でもある。

現時点で天上院さんを守る物は無く、このままでは彼女は一方的に直接攻撃を受けてしまう。

それを防ぐためには、相手の場を一掃するか、最低でも罠カードを伏せておく必要がある。

「僕のターン、ドロー。」

……手札から魔法カード“トレード・イン”を発動。“ダーク・ネフティス”を捨て、2枚ドロー。

更に“闇の誘惑”を発動。2枚ドローし、手札の“堕天使アスモデウス”を除外」

「っ！ 来るぞ、翔！」

「く、九条君……もしかしくなくても、本気……？」

「手札から装備魔法“D・D・R”を発動。手札を1枚捨て、除外されていた“堕天使アスモデウス”を特殊召喚。

“堕天使アスモデウス”の効果により、デッキから“堕天使スペルビア”を墓地へ送る。そして、場の“ダーク・パーシアス”をリリースし“堕天使ディザイア”を召喚」

「そんな、攻撃力3000のモンスターが2体も！？ ……ってち

よつと待つツス！　なんでレベル10のモンスターがリリース1体で召喚出来るんスか！？」

「落ち着けよ、翔。　“墮天使ディザイア”は特殊召喚出来ない代わりに、場の天使族1体をリリースすることで召喚出来るモンスターなんだ。そうだよな、九条」

その通りである。そして、“墮天使ディザイア”はもう一つ効果を持つ。

「“墮天使ディザイア”の効果を発動。1ターンに一度、攻撃力を1000下げること相場の場のモンスター1体を墓地に送る。

効果対象は“サンダー・ジャイアント”」

「くっ……」

これで十代の場のモンスターは消えた。伏せカードが気になるが、ここは一気に行くべきか。

「バトル。2体で十代にダイレクトアタック」

「悪いな九条、罠カード発動“聖なるバリア　ミラーフォース”」

！　“ディザイア”と“アスモディウス”は破壊させてもらっぜ！」

「……“アスモディウス”が破壊されたため、“アスモトークン”と“ディウストーン”が特殊召喚される。
バトル続行。十代にダイレクトアタック」

「ぐっ！」　相手LP8000　6200　5000

「ターン、エンド」

出来ることなら十代までターンを回したくないが……厳しいか？
天上院さんは非常に優秀な決闘者ではあるが、場に何も無い状態から5000のライフを削りきるのは難しいだろう。

いや、その前に翔だ。実のところ、自分は翔との対戦経験が無いため、手の内が全くと言っていいほど解らない。

しかし、機械族は単純な力押しならば間違いなく最強の一角に名を連ねる種族だ。

翔が奥の手を隠している可能性もある以上、油断は出来ない。

「僕のターン、ドロー……っ!？」

ドローしたカードを見た瞬間、翔の表情が強張った。

目当てのカードではなかったのか？　だが、運の要素が絡む以上、それはある程度は仕方ないことだ。翔もそれは理解しているはず。では何故、あんな表情をする必要が？

「手札から魔法カード“融合”を発動！　場の“ドリルロイド”と、手札の“スチームロイド”“サブマリノロイド”を融合！
“スーパービークロイド ジャンボドリル”を特殊召喚！」

3体融合……やはり奥の手があったか。

しかし、先程ドローしたカードは使っていないようだ。やはり、必要なカードをドローしてしまったただけだったのだろうか？

「バトルだ！　明日香さんにダイレクトアタック！」

「モンスター効果発動。墓地の“ネクロ・ガードナー”を除外し、

一度だけ攻撃を無効にする」

「いつの間に!?!」

「“D・D・R”の発動コストか!?!」

十代、正解。

あのモンスター、“スーパービークロイド ジャンボドリル”の攻撃力は3000と、あっさり無視は出来ない数値だ。

“融合解除”による追撃の可能性も考慮し“ネクロ・ガードナー”を使ったが、早計だっただろうか?

「ありがとう、九条。助かったわ」

「いえ、大したことでは……」

実際、自分のしたことなど時間稼ぎでしかない。

翔のモンスターは健在であり、しかもその対処を天上院さんに丸投げする形になっている。

そもそも、この状況は自分が招いたものだ。先程、“ドリルロイド”を破壊してさえいればこうはならなかった。

少しでも多くのライフポイントを削ることに固執するあまり、視野が狭まっていたことに疑念を挟む余地はない。

駄目だ。本当に自分は駄目な人間だ。

「くっ……カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

手札から魔法カード“強欲な壺”を発動！ 2枚ドロー……九条、あなたのモンスターを借りるわ」

「どうぞ」

モンスターではなく、トークンですが。

「儀式魔法“機械天使の儀式”を発動！ 手札の“サイバー・チュ”と九条の場の“ディウストークン”をリリースして、“サイバー・エンジェル 韋駄天”を特殊召喚！

“韋駄天”が特殊召喚された時、自分の墓地から魔法カードを1枚手札に加える。私は“強欲な壺”を手札に加え発動！ 2枚ドロー！」

凄まじいドロー加速である。

しかし、“韋駄天”の攻撃力は1600。翔の“ジャンボドリル”には勝てず、ライフを削りきることも出来ない。

「更に装備魔法“リチュアル・ウェポン”を発動！ これにより“韋駄天”の攻撃力は1500ポイント上昇するわ」

「攻撃力……3100!？」

「バトルよ！ “韋駄天”で“ジャンボドリル”に攻撃！」

「させない！ 罨発動“炸裂装甲”！ “韋駄天”を破壊する！」

「無駄よ！ 手札から速攻魔法“我が身を盾に”発動！ 1500
ライフポイントを払い、“炸裂装甲”を無効化するわ！」 自LP

8000 6500

「そんな!？」 相手LP5000 4900

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

流石、と言うべきか。モンスター強化までの一連の流れもそうだが、翔の伏せカードにも冷静に対処し、確実に攻撃を通した手腕も素晴らしいの一言に尽きる。

やはり、自分が彼女に勝てたのは運が良かっただけなのだろう。仮にもう一度決闘を行えば、結果は逆になるはずだ。

そんな人が自分とタッグを組んでいる。ならば、これ以上無様を晒すわけにはいかない。

「俺のターン、ドロー！」

手札から“E・HERO バブルマン”を召喚！ このカードが召喚された時、自分の場に他のカードが無い場合2枚ドロー出来る！」

十代の引きの強さはよく知っている。双子という関係上、おそらく自分が最も十代と決闘をしているだろう。

だからこそ断言出来る 十代は、追い込まれてからが一番強い。

「手札から“強欲な壺”を発動！ 2枚ドロー！」

更に魔法カード“融合”を発動！ 手札の“E・HERO ワイルドマン”と“E・HERO エッジマン”を融合して、“E・HERO ワイルドジャーマン”を召喚！

どんどん行くぜ！ 装備魔法“バブルショット”を“バブルマン”に装備！ これにより“バブルマン”の攻撃力は800アップ！

そして、フィールド魔法“摩天楼 スカイスクレイパー”を發動
！」

これは、マズい！

「“韋駄天”の攻撃力は俺のモンスターより高い……よって、“摩天楼 スクレイパー”の効果で“E・HERO”の攻撃力は1000アップする！」

「なっ！？」

「バトルだ！ “ワイルドジャギーマン”で“韋駄天”に攻撃！」

「くっ」 自LP6500 6000

「まだだ！ “ワイルドジャギーマン”は相手モンスター全てに攻撃することが出来る！ “ディウストークン”に攻撃！」

「……そうだったな」 自LP6000 5200

“韋駄天”が破壊されたことで、“摩天楼 スカイスクレイパー”の効果が解けたのは不幸中の幸いか。

「まだ残ってるぜ？ “バブルマン”で攻撃！」

「くっ……」 自LP5200 3600

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

これはまた、手酷くやられたものだ。最後の手札が“融合解除”だ

つたら終わっていたが、どうやら違っただけらしい。

「僕のターン、ドロー」

……引きが強いのは自分も同じか。

「場の“神の居城 ヴァルハラ”の効果を発動。手札から“墮天使ゼラート”を特殊召喚。

手札の“ダーク・パーシアス”を捨て、“墮天使ゼラート”の効果を発動する。相手の場のモンスターを全て破壊」

「ここで“ゼラート”かよ!？」

「“ゼラート”で、ダイレクトアタック」

これが通ればあと一押しだが

「させるか! 罠カード発動“攻撃の無力化”!」

やはり、一筋縄ではいかないか。

「罠カード発動“トラップ・ジャマー”! 残念ね、十代」

! 罠カード対策とは……本当に、天上院さんには助けられてばかりだ。

「ぐっ!」 相手LP4900 2100

「魔法カード“アドバンス・ドロー”を発動。“墮天使ゼラート”をリリースし、カードを2枚ドロー。カードを1枚伏せ、ターンエ

ンド

……天上院さん、フォローありがとうございます」

「さっきのお礼よ、気にしないで。それに」

「？」

「私達、パートナーでしょう？　だったら助け合うのは当然よ」

「！　はい」

そうか……彼女は自分をパートナーとして認めてくれていたのか。ならば、その信頼に応えよう。もう期待は裏切らない。

この身の全てを賭して、彼女に勝利を。

「僕の、ターン……ドロー……っ、ターン、エンド」

弱々しい声にハッとして、翔の方へと視線を向ける。
何も出来ることが無かったらしく、ドローして直ぐにターンを終了してしまった。

……やはり様子がおかしい。先程のは思い過ごしではなかったようだ。

「翔、どうした？」

「翔君……？」

十代と天上院さんも異変に気づいたのか、気遣うように声を掛ける。

「やっぱり僕、ダメだ…… タッグデュエルに勝つなんて無理だよ……」

「何言ってるんだ、翔。今からそんな弱気で」

「やっぱり僕じゃ、アニキとタッグを組むなんて無理なんだよ！」

「翔！？」

何とか元気付けようとした十代の言葉を遮るように、翔は走り出した。

正に不意打ち。完全に此方の虚を突く形で、反応する間もなく翔は走り去ってしまった。

…… 本当に、どうしたというんだ。

何か理由があるのだろうか、当人がいないのでは問い質すことも出来ない。

誰か知っている人がいれば手っ取り早いのだが…… と思っていたら、意外と近くに手掛かりはあった。

正確には、手掛かりの手掛かりと言ったところか。

天上院さんの話によると、オベリスク・ブルーの3年生に翔の兄がいるらしく、その人なら何か知っているのでは？ とのことだ。

しかし、デュエルアカデミアの帝王 カイザー亮、か。

翔に兄がいたのにも驚いたが、その兄がアカデミア最強の男というのにはもっと驚いた。

つまりこれはアレか。翔には秘めたる力が眠っており、将来的にはそれが覚醒するという伏線か？

可能性として有り得なくはないのでは……？ と、寝不足の頭で割と真剣に考える自分の隣で、十代は翔の兄への挑戦を決意していた。

……微妙に翔のことより決闘の方に興味が傾いているのも、仕方ないと言えば仕方ないことだろう。

アカデミア最強と聞いて、興味を引かれない方がおかしい。自分も一度、是非お手合わせ願いたい。無論、そんな機会は早々無いだろうが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905s/>

遊戯王GX～ある双子の兄の場合～

2011年5月26日14時28分発行